

§ 29. ハンゴンソ ななつば *Senecio palmatus* Pall.

- (1) *ionka-kuttar* (i-ón-ka-kut-tar) 「イオンカクッタル」 [i (それを) ónka (放置しておいてねばりをなくさせる, 風化させる) kúttar (圓棒状莖)] 莖 《名寄, 近文》

注 1. —天鹽地方でわこの莖葉を敷いてその上にオウバユリの鱗莖を搗いた粕をのせ風化させるのに使う。詳しくわ後で説く。

- (2) *oro-mun* (o-ró-mun) 「オロムン」 [oró (その中) o (に入れる) mun (草)] 莖葉 《釧路, 日高沙流郡》

注 2. —オウバユリの鱗莖をどろどろに潰したもののの中にこの葉を入れておくと粘りがなくなつて粕が取り出しやすくなるとゆう。

- (3) *oremu* (o-ré-mu) 「オレム」 [＜oromun] 莖葉 《長萬部》

- (4) *oroma-kuttar* (o-ró-ma-kut-tar) 「オロマクッタル」 [oró (その中) omá (に入れる) kúttar (圓棒状莖)] 莖 《穂別》

- (5) *yuk-kuttar* (yúk-kut-tar) 「ゆクッタル」 [yuk (鹿) kuttar (筒状莖)] 莖 《穂別》 《A 上川》

注 3. —今の老人わ「鹿の圓棒莖」を意識しているけれども、もとわ *i-úk-kuttar* であつて、i (それを) uk (取り出す) kuttar (筒莖) の義。ウバユリの鱗莖の搗き粕を取り出すのに用いたからそうゆう名が附いたのである。

- (6) *yuk-kutu* (yúk-ku-tu) 「ゆクツツ」 [yuk (鹿) kutu (筒莖), 但し, 語原わ i (それを) u: (とりだす) kutu (圓棒莖)] 莖 《襟似》

- (7) *pekampe-kutu* (pe-kám-pe-ku-tu) 「ペカンベクツツ」 [pekampe (菱の實) kutu (圓棒莖)] 莖 《美幌, 屈斜路, 足寄》

注 4. —この花が咲けば沼の上でわ菱の實がみのもと (屈斜路)。

- (8) *pekampe-kuttar* (pe-kám-pe-kut-tar) 「ペカンベクッタル」 [菱 (の) ・圓棒莖] 莖 《A 石狩》

- (9) *urayni-kina* (u-ráy-ni-ki-na) 「ウライニキナ」 [uráyni (棒) kiná (草)] 莖葉 《白浦》

注 5. —「ウライニ」わ, もと「やなぐい」の義。「ウライ」(築)。「ニ」(杭)。

今わ, 各地で單に棒の意味に用いられる。例えば長萬部でわ, オウバユリの根を掘るのに特別の棒を用意するが, それを「ドレッ・タ・ウライニ」と稱する。turep (オウバユリの鱗莖) ta (掘る) urayni (棒)。

- (10) *urayne-kina* (u-ráy-ne-ki-na) 「ウライネキナ」 [＜urayni-kina] 莖葉 《眞岡》

(参考) この植物わ, 若苗を茹でて汁の實にした (幌別)。

その葉わ, オウバユリの鱗莖を潰してどろどろにした中に入れておけば粘りがなくなつて粕をとりだすのに都合がよくなる (美幌)。

莖葉を敷いてその上にオウバユリの鱗莖の搗き粕を寝かせておく。この寝かせておいたものを「おンドレナ」on-turep (風化した・ウバユリ) とゆう (名寄)。

葉わ, それを焼いて, 灰を濕疹にすりつけた (眞岡)。莖葉も黒焼にして犬の油で練り白癬に塗った。根わ, 煎じて咽喉の痛みに含嗽した (白濱)。根わ, また, 鍋の水が半分になるほど濃く煎じて, 性病, 子宮病, 神経痛, 關節炎等の患部を洗った (眞岡)。

この植物の7個の截痕ある葉を擇んで乾かし, それで梅毒の潰瘍を洗い, 「シケレベ」(きわだ)の末を貼布する (あいぬ醫事談, p. 64)。胎毒による吹出物をこの煎汁で洗った (幌別)。

§ 30. メナモミ *Siegesbeckia pubescens* Makino

- unkere-kina* (ún-ke-re-ki-na) 「ウンケレキナ」 [un (我らを) kere (削る, ひっかく) kina (草)] 莖葉 《幌別》 《A 沙流, 千歳》

§ 31. タンボボ *Taraxacum platycarpum* Dahlst.

- (1) *kunaw* (ku-náw) 「クナウ」 花 《幌別, 長萬部》

- (2) *epitche-kina* (e-pít-che-ki-na) 「エビッチェキナ」 [epitche (禿げている, 禿頭の) kina (草)] 花莖の頂から種子が飛散してしまった後の部分をゆう 《襟似》

- (3) *epitche-nonno* (e-pít-che-non-no) 「エビッチェノンノ」 [禿げている・花] 冠毛を有する果實がまだ飛散しないものをゆう 《幌別》。

- (4) **honóynoyep** (ho-nóy-no-yep) 「ホのイノイエナ」 [ho (尻を) nóynoye (よじりよじりする) -p (者)] 花莖 《様似》《A 沙流・千歳》

注 1. — 蝦夷草木志料に幌別の語として「ホノキノヤ」(honóynoya) が擧げられている。やはり「尻をよじりよじりする者」の義である。この花莖は割れば振れて行くからであろうが、アイヌはそれに巫女の舞を聯想したらしく、この花莖を雨乞の呪術に用いた地方がある。後説参照。

- (5) **ruchaus-apappo** (ru-chá-us-a-pap-po) 「ルチャウシアパッポ」 [ru (路) cha (傍) us (に群生する) apappo (花)] 花 《春採》

(参考) この植物わ、その若葉を取って茹でて汁の實にした。腹痛の時、全草を煎じて飲んだ。子供らわ、花莖で笛を作って鳴らしたり、冠毛を吹き飛ばして遊んだりした(幌別)。

この花莖を雨乞の呪術に用いた地方がある。日高国様似地方でわ旱魃の時、テレケウシとゆう所え行つて、人目に觸れぬ様にして、この花莖を石の上にのせ、

honóynoyep	尻をよじりよじり舞う者よ
honóynoyep	尻をよじりよじり舞う者よ
i-riten-ka	物をやわらかくせよ
i-riten-ka	物をやわらかくせよ
ruámpe as	雨ふれ
ruámpe as	雨ふれ

と唱えながら叩き潰したとゆう。→補註(10)。

§ 32. ツリガネニンジン *Adenophora verticillata* Fisch.

エゾツリガネニンジン *Adenophora Thunbergiana* Kudo

- (1) **mukekasi** (mu-ké-ka-si) 「ムケカシ」 [muk (→§ 33, 注 1) ekasi (祖父, 翁)] 根 《北海道各地》 →補註(11)。

- (2) **moskarpe** (mós-kar-pe) 「もシカルペ」 莖葉 《名寄》

注 1. — オオバイラクサの莖と葉を móse とゆう。それを刈り取ること、それに限らず一般に草を刈り取ること、それをも móse と云い、あるいわ「もセカル」(móse-kar), さらに訛って「もシカル」(mós-kar) とゆう。モセウシ

とゆう地名が各地に見出されるが、それにわ、1) móse (蕁麻) -us (群生する) -i (所), 2) móse-us (いつもそこで草を刈る) -i (所), この二つの場合があるのである。mós-kar の方わ、例えばホリ(産卵穴)を掘っている鮭の雄魚を ikúspe-tuye-p (柱を・切る・者) とゆうのに對して、雌魚を mós-kar-pe (草を刈る・者) と稱する。この場合の moskar わ産殿の屋根や壁を葺く萱草を刈る意味である。→補註(12)。

mosekar, moskar わ、獲物(山幸や海幸)を安置するために草を刈り取ること、およびその目的で刈り取った敷き草、あるいわそれで編んだ敷物、などの意味にもなる。

沖から魚を積んで舟が歸つて来る。波打際まで来ると船頭が岸え向つて、

mosekar tuye (敷草 刈れ)!

と叫ぶ。すると岸の女たちわ近くの草原からイタドリやヨモギを刈つて来て演え敷く。舟が陸え上つたら、魚わ必ず一旦この敷草の上に置きならべ、それから家の中え運ぶ。家の中にもやはりあらかじめ敷草を敷いておいて、その上え魚をおく。その敷草がモセカルなのである。(参照、佐藤三次郎、北海道幌別漁村生活誌, p. 64)

人祖「アイヌラックル」Aynu-rakkur [aynu (人) rak (臭い) kur (神)] が生れてはじめて山狩に行き、大鹿を見つけて矢を射ると、その矢がみごとに命中し、大鹿が少し逃げて行つて草の上によるめきながら倒れて行く。そのこの所を神話でわ次の様に述べている(参照、アイヌ聖典, p. 22)。

tumam-kasike	その胴の上で
pirka pon ay	美しい小矢が
ko-ror-kosanu.	ずぶりと鳴る。
hanke-no-tek	ほんの僅か向うえ
kira wa arpa,	逃げて行き、
e-so-ne-moskar	草を
e-yay-moskar-	枕に
sama-hitara	よるめき倒れて行く。

最後の3行を直譯すると、e (そこが) -so (寝床) -ne (になる) -moskar (敷

草), e (それを) -yay (自分で) -moskar (刈りと) -samahitara (横にひろげて行く), すなわち「敷いて寝るべき敷草を自分で刈りとり横にならべて行く」ということで、大鹿の巨體が頭の方から次々に草を敷いて倒れて行くさまを述べたのである。このモシカルに對して金田一京助博士は「茅 (nupkaush kina) 蒲 (rapempe) などを編みて食物供物などの下に敷くもの」と註して居られる (アイヌ聖典, p. 22)。→補註(13)。

ツリガネニンジンの莖葉を「モシカルペ」というのを、おそらくこれを敷草に使ったからであろう。

(3) moskarape (mós-ka-ra-pe) 「モシカラペ」 莖葉 《真岡, 白浦》

(4) raypusi (ráy-pu-si) 「らいプシ」 根 《真岡, 白浦》

注 2. —おそらく ráypeusi が原の形であろう。北蝦夷圖説に「ライヘウシー 名モシカルペ」とある。

(参考) 根をそのまま煮たり焼いたりして食った (北海道, 樺太)。根を飯にたきこんで油を入れて食った (白浦, 真岡)。根を潰して麥粉 (moká <ロシア語) を混ぜ、また混ぜずに、揚げ物「チとホ」 chitotox [chi (われら) toto (揚げる) -p (もの)] にして食った (真岡, 天鹽)。根の煎汁を帶下の洗劑に用いた (白浦)。花の中に玉があって子供らわ食べて遊んだ (足寄)。

§ 33. ツルニンジン *Codonopsis lanceolata Benth. et Hook.*

(1) chiru-muk (chi-rú-muk) 「チルムク」 根 《美幌, 屈斜路》

(2) tope-muk (tó-pe-muk) 「とぺムク」 根 《B》

(3) top-muk (tóp-muk) 「とムク」 根 《A 沙流・鶴川・千歳・上川》

(参考) この植物は、根を焼いて食ひ、また煮て油をつけて食った。母乳の出ない時、煎じて飲み、同時にその煎汁で乳房を冷した (美幌)。この植物は蔓性なので、chiru-muk [chiru は日本語ツルの訛り、すなわち「蔓になる muk」の義] と云い、また蔓を切ると乳汁 [tó (乳) -pe (汁)] の様な液が出るので tópe-muk [乳汁の出る muk] と云い、それが類音 top (竹) に引かれて tóp-muk ともなったのである。また tope-muk という所から類感呪術によって乳の出る薬にもなったのである。

§ 34. バアソブ *Codonopsis ussuriensis Hemsl.*

muk 「ムク」 根 《北海道全地》

注 1. —muk わ普通バアソブの根をさすけれども、合成語の中でわそうでない用例も若干見出される。

chikap-muk (キジカクシの地下莖)

chiru-muk (ツルニンジンの根)

top-muk (ツルニンジンの根)

muk-ekasi (ツリガネニンジンの根)

尙、古語の中で丸い物のころがる様を形容して、

muk karkarse sikopayar (バアソブの根がころがるのとそっくりだ)

という。

注 2. —パチラア辭書に別に、

Muki-itangi ムキイタンギ

と出ている。これわ宮部博士から取ったのである。宮部博士等の植物名詳表によれば十勝川筋でそう云うことになっている。しかし私の調査によれば十勝川筋でもバアソブの根やはり muk であって、muki-itangi とわ云わない。それわ恐らく muk (バアソブの根) itanki (椀) であろうが、採集者の側に何か誤解があって、それをバアソブの名としたのでわなかろうか。

(参考) この植物の根は、ツルニンジンのそれと同様、焼いたり煮たりして油をつけて食った。また、根を生のままでも嚼った (幌別)。

§ 35. キキョオ 桔梗 *Platycodon glaucum Nakai*

辭書 (B) に *Ainuma-kina* とある。採集地は例によって不明。

§ 36. アマチャズル *Gynostemma pentaphyllum Makino*

辭書 (B) に *Ira-pungara* とある。詳表 (A) によれば、採集地は沙流、鶴川、及び石狩である。ira-punkar わもと i-ri-punkar 「我らを・傷ける・蔓」という意味で莖に刺毛を有する植物らしいから、アマチャズルに適した名稱でわない。宮部金吾博

士わ最近の論文でわミゾソバの一名として居られる (アイヌ植物名に就いて, 植物研究雑誌, 第 24 巻第 1~12 号, p. 6)。それだと, うなずける。尙, 蝦夷草木志料にわビロロ (廣尾) の採集としてイラブンカラの語をあげ, 「ヤブガラシ」に同定している。

§ 37. オミナエシ *Patrinia scabiosaefolia* Link.

- (1) **tapkar-kina** (tap-kar-ki-na) 「たッカルキナ」 [踏舞する・草] 莖葉 《A 十勝》
 (2) **setakpe-kina** (se-ták-pe-ki-na) 「セタッペキナ」 莖葉 《A 沙流》《蝦夷草木志料——十勝トウプイ》

§ 38. オトコエシ *Patrinia villosa* Juss.

- (1) **tapkar-mun** (táp-kar-mun) 「たッカルムン」 [踏舞する・草] 莖葉 《本別》
 注 1. — 酋長が手をひろげて踏舞する様に似ているからこの名があると。
 (2) **yuttara-kina** 「ユッタラキナ」 《B》
 注 2. — 蝦夷草木志料に「ユッタラ」とある。採集地「廣尾」。

§ 39. ウコンウツギ *Weigela Middendorffiana* Lem.

辭書 (B) に kamui-aekarip, kamui-aikarip とある。採集地不明。

§ 40. クロミノウゲイスカゲラ

Lonicera caerulea L. var. *emphyllocalyx* Nakai

- (1) **enumitanne** (e-nú-mi-tan-ne) 「エヌミタンネ」 [e (頭) numi (の粒) tanne (長い)] 漿果 《美幌, 屈斜路, 足寄》《A 沙流・鵝川・千歳》
 注 1. — この漿果にわ, 粒の細長いのと丸いのががある。細長い方が大きくて甘い。enumitanne とゆう名わ, 本来この細長い方に附いた名である。和人わそれを訛ってエノミダニとゆう。
 注 2. — 樺太の植物 (F) に『エヌンタンネ』とある。

注 3. — コタン生物記 (D 屈斜路) にわ『エノミタンネ』と出ている。

- (2) **haskap** (hás-kap) 「はシカッ」 [has (枝條) ka (の上) o (に澤山なる) p (もの)] 漿果 《幌別》
 注 4. — 釧路東部の日本語方言がそれを取り入れてやはりハシカッと云い, 室蘭線沼ノ端驛でわハシカッ飴やハシカッ羊羹の呼び賣りをしている

§ 41. エゾヒョオタンボク

Lonicera alpigena L. var. *Glehnii* Nakai

- (1) **ayna-ni** (áy-na-ni) 「あィナニ」 [ayna (矢尻と矢柄とを連結する木) ni (木)] 莖 《真岡》
 (2) **aynanni** (áy-nan-ni) 「あィナンニ」 [＜ayna-ni, 或いわ＜ayna (上記) ne (になる) ni (木)] 莖 《同上》

注. — 以上の他に文献にわ次の名が見えている: —

aya-ni	《E 樺太》
kasserokta-ni	《B 樺太》
kasserochita-ni	《ibid.》

(参考) 矢の先と矢柄のみならず, 槍先と槍の柄を連結する部分も, この木で作った。槍の先と柄とを連結する部分わ「ラッスマ」rássuma (北海道西南部の rasúpa に當る) とゆう (真岡)。

§ 42. キンギンボク ヒョオタンボク

Lonicera Morrowii A. Gray

- (1) **kinne-ni** (kín-ne-ni) 「キンネニ」 莖 《A 有珠》
 (2) **epotpochi** (e-pót-po-chi) 「エポッポチ」 果實 《同上》

§ 43. ベニバナヒョオタンボク *Lonicera sachalinensis* Nakai

- (1) **ayna-ni** (áy-na-ni) 「あィナニ」 [ayna (矢尻と矢柄とを連結する木) ni (木)] 莖 《A 沙流・千歳・上川》《穂別》
 (2) **ponechi** (po-né-chi) 「ポネチ」 莖 《襟似, 足寄, 屈斜路, 美幌》《A 北見・

根室)

注 1. —ponechi の語原に就いてわ、「枯れた枝が骨の様なといふので骨の木と呼ばれてゐるのである」(D p. 32) とする説もあるが、これわアイヌ語の意義と語法を無視した説である。なるほど pone わ「骨」であり、chi にわ「枯れた」という意味もあるが、pone chi となれば「骨が煮えた」としかならない。「枯れた骨」とも「骨の木」ともなりっこないのである。これわ骨の煮えたも御存じない説である。ponechi わ、或いわ pon-nichi, pon (小さい) nichi (その柄、<nit 柄) で、もとわやはり矢尻と矢柄とを連結する織ぎ柄を云ったのでわなかるうか。足寄でわ、現にこの木でさうゆう織ぎ柄を作ったとゆう。

§ 44. ネムロブシダマ

Lonicera chrysantha Turcz. var. crassipes Nakai

- (1) ponechi (po-né-chi) 「ポネチ」 莖 《D 屈斜路》
- (2) isorokanni (i-só-ro-kan-ni) 「イソロカンニ」 [e (それで) sore (かなな合) kar (造る) ni (木)] 莖 《穂別》

§ 45. エゾニワトコ

Sambucus Buergeriana Bl. var. Miquelii Nakai

- (1) sokon-ni (so-kón-ni) 「ソコンニ」 [si (糞) kor (持つ) ni (木)] 莖 《美幌, 屈斜路, 足寄, 塘路, 名寄, 長萬部》(A 有珠)
 - (2) soko-ni (so-kó-ni) 「ソコニ」 [<si-kon-ni] 莖 《幌別, 穂別, 様似, 鶴城》
 - (3) osiko-ni (o-si-ko-ni) 「オシコニ」 [<o-si-kon-ni, o (尻) -si (糞) -kor (持つ) -ni (木)] 莖 《白浦》
- 注 1. —この木わ臭氣を持つので「尻に糞をつけている木」と呼び、それによって除魔力を發揮せしめようとしたのであろう。Cf. § 69.
- (4) osoko-ni (o-só-ko-ni) 「オソコニ」 [<o-si-kón-ni] 莖 《真岡》
 - (5) ospara-ni (ós-pa-ra-ni) 「オシバラニ」 [<o (尻) si (糞) para (ひろがっている) ni (木)] 莖 《幌別》
 - (6) aspero-ni (ós-pe-ro-ni) 「オシペロニ」 [<ospara-ni] 莖 《禮文華》

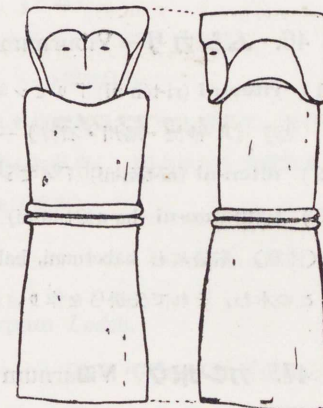
注 2. —pero-ni (ミズナラの莖) に對する縁語牽引である。

- (7) onne-chikuni (ón-ne-chi-ku-ni) (おネチクニ) [onne (老大な) chikuni (木)] 莖 《幌別》
- (8) chikap-ipe (chi-ka-pi-pe) 「チカビペ」 [鳥の・食糧] 果實 (俚言からすのまんま) 《幌別》

(参考) この木わ、特有の臭氣を持つので、そこに除魔力を認め、薬用呪術用としてひろく用いられた。onne-chikuni [老大な・木] とわこの見地から尊んで云った名稱である。

幌別でわ、この木を魔除けの木幣に作った時に限り、sokoni-inaw とゆう。それ以外の時に sokoni と云えばそれわクサギをさすことになる (→§ 69)。

樺太でわ、この木の枝でお守りの人形を作り、子供の着物の衿またわ帶の所に結びつけておく。それを白浦でわ「セにシテ・ニボボ」 seniste-nipopo [si (自分が) -e (それによって) -niste (堅固になる) -nipopo (<ni-po-po 木の・小さな・子)] と云った鶴城でわ。これで「ソコニ・ナンコロベ」 [sokoni (=ワトコの) -nan (顔を) -koro (もつ) -pe (者)] と稱する人形を作った。→補註(14)。



nipopo (樺太白濱アイヌ土俗品, 河野廣道氏所藏)

この木の「掻き屑」(木質部に小刀の刃を直角に當てて掻き取った綿状の物, 北海道「にマウ」 nimaw, 樺太「ろチ」 róchi) を水に浸しておいて、その浸出液で目を洗った (真岡)。また、この掻き屑を水に浸けておき、石を焼いて、それで包んで打身・疝氣等の患部を熨法した (同地)。

産後にわこの掻き屑を適當な容器に集めて水を注ぎ、それに焼石を投じて、必要な麻の布に5分位の厚さに伸ばして肩から胸、さらに腹いちめんを包んで温めた (白浦)。この掻き屑わまたそれで髪を洗ったり油手を拭ったりするのに用いた (同地)。

この木の皮又わ小枝を煎じて産前産後に飲んだ (幌別)。

難産の際この木に小刀で穴をあけ、その穴から妊婦の衿首を吹きながら、

poho sika! 子よ 出よ!

poho sika! 子よ 出よ!

と唱えた(鶺鴒城)。

果實も食べた(美幌)。又それを潰して疥癬の患部に擦りこんだ(樺太)。

この木で木幣を作り、それで悪神を送れば絶対戻って来ない(幌別)。この木は主として男の墓標に使った(塘路、天鹽)。屍體を包む莫産を綴じ合やす串はこの木で作った(屈斜路)。この木の若枝で鯨の尻を繋ぐ棒を作った(真岡)。

§ 46. ムシカリ *Viburnum furcatum* Blume

(1) **riten-ni** (ri-tén-ni) 「リテンニ」 [riten (柔軟な) ni (木)] 莖 《様似、長萬部》 《A 沙流・鵝川・石狩》 →補註(15)。

(2) **niten-ni** (ni-tén-ni) 「ニテンニ」 [<riten-ni] 莖 《真岡》

(3) **hametun-ni** (ha-mé-tun-ni) 「ハメトンニ」 莖 《白浦》

(注意) 辭書にわ habetunni, habitunni, hapitunni などと書いてある。

この木わ、それで仕掛弓を作り、また tésuma (かんじき) を作った(真岡)。

§ 47. カンボク *Viburnum pubinerve* Bl.

(1) **yarpe-ni** (yár-pe-ni) 「ヤルペニ」 莖 《長萬部、幌別、穂別、様似》 《A 沙流、千歳、上川》

(2) **paskurep** (pás-ku-rep) 「パシクレッ」 [鳥が食う物] 果實 《幌別》

(参考) この果實わ、その浸出液を目薬に用いた。また、胃の悪い時にも食べた。また、この木で火箸を作った(幌別)。

§ 48. ミヤマガマズミ じょおみ (方言)

Viburnum Wrightii Miq.

(1) **kirayni** (ki-ráy-ni) 「キライニ」 [kiray (鶺鴒) ni (木)] 莖 《幌別、穂別》

(2) **kirani** (ki-rá-ni) 「キラニ」 莖 《室蘭》

(3) **chirayni** (chi-ráy-ni) 「チライニ」 [chiray (イト魚) ni (木)] 莖 《様似》

(参考) — 以上の他、文献には次の語が見えている。

『カワツニ』 *kawat-ni* (B)

『カワニ』 (F)

後者わ恐らく *kawaxni* の開誤りであろう。

これで櫛を作った(幌別、穂別)。

§ 49. クルマバソオ *Asperuba odorata* L.

(1) **hus-kina** (hús-ki-na) 「フシキナ」 莖葉 《真岡》

(2) **yus-kina** (yús-ki-na) 「ユシキナ」 莖葉 《白浦》

(3) **yus-kara-kina** (yús-ka-ra-ki-na) 「ユシカラキナ」 莖葉 《白浦》

注。 — 他に辭書にわ *inau-ni-kina* がある。 →補註(16)。

(参考) この植物わ、特有の臭氣をもち、それが病魔を近づけぬと信じて、流行病のある際その莖葉の「ラセイ」 *úsey* (煎汁) を盛んに飲用し、粥の中にも少量炊き込んで食ったりした。ふだんから乾し貯えておいた(真岡)。

§ 50. キバナノカワラマツバ

Galium verum L. var. *leiocarpum* Ledeb.

manchiw-kina (mán-chiw-ki-na) 「マンチウキナ」 [満州・草] 莖葉 《真岡、白浦》

(参考) 神経痛・関節炎等骨の病む病氣(「ボにチコイキ」 *poni-chikoyki*) にわこの莖葉で湯を沸かして入った(真岡)。煮詰めれば飴のようになるので、それを打身につけた(白浦)。

§ 51. ヤエムグラの一種 *Galium* sp.

Susu-kina 《B 樺太》

§ 52. アカネムグラ *Rubia iesoensis* Miyabe et Miyake

(1) *Inau-na-kina* 《B》

(2) *Susu-kina* 《G 樺太》

§ 53. オオバコ *Plantago major* L. var. *asiatica* Decne.

- (1) **erumkina** (é-rum-ki-na) 「えルムキナ」 [érum (鼠) kiná (草)] 葉 (地上部) 《長萬部, 蛇田, 有珠, 室蘭, 幌別, 白老, 穂別, 名寄》
- (2) **erumsar** (é-rum-sar) 「えルムサル」 [érum (鼠) sar (尾)] 穂 《上記各地》
- (3) **erumkina** (e-rúm-ki-na) 「エるムキナ」 [erúm (鼠) kiná (草)] 葉 《白浦》
- (4) **erum-parakina** (e-rúm-pa-ra-ki-na) 「エるムバラキナ」 [erum (鼠) parakina (ミズバシヨオ)] 葉 《白浦》
- (5) **erumkina chihe** 「エるムキナ ちへ」 [erumkina (オオバコ) chihe (の陰莖)] 穂 《白浦》
- (6) **erumkina oxchara** 「エるムキナ おホチャラ」 [erúmkiná (オオバコ) óxchara (の尾)] 穂 《白浦》
- (7) **erumkina kutuhe** 「エるムキナクドへ」 [erúmkiná (オオバコ) kutúhe (の圓棒状の莖)] 花・莖 《白浦》
- (8) **enumkina** (e-núm-ki-na) 「エぬムキナ」 [enúm (鼠) kiná (草)] 葉 《眞岡》
- (9) **enum-parakina** (e-núm-pa-ra-ki-na) 「エぬムバラキナ」 [enúm (鼠) parákina (水芭蕉)] 葉 《眞岡》
- (10) **ukokaptuyep** (u-kó-kap-tu-yep) 「ウコカプドイエナ」 [u (互) ko (に) kap (皮を) tuyé (斷る) p (もの)] 花莖・地上部 《様似, 足寄, 春探》
- (11) **ukokaptuye-mun** (u-kó-kap-tu-ye-mun) 「ウコカプドイエムン」 [u (互) ko (に) kap (皮を) tuyé (斷る) mun (草)] 花・莖・地上部 《屈斜路》
- (12) **ukokatuyep** (u-kó-ka-tu-yep) 「ウコカドイエナ」 [u (互) ko (に) ka (糸を) tuyé (斷つ) p (もの)] 花莖・地上部 《名寄》
- (13) **ukokonchietayep** (u-kó-kon-chi-e-ta-yep) 「ウココンチエタイエナ」 [u (互) ko (に) kónchi (帽子) etáye (引く) p (もの)] 花・莖 《幌別, 穂別》

注 1. — 本來わ u (互) -ko (に) -kunchi (くじ) -etaye (引く) -p (もの)

であった。後説。

- (14) **ukosetaturyep** (u-kó-se-ta-tu-yep) 「ウコセタドイエナ」 [u (互) ko (に) seta (犬) tuyé (斷つ) p (もの)] 花莖・地上部 《江部乙, 近文》
- (15) **ukonketep** (u-kón-ke-tep) 「ウコンケテナ」 [u (互を) konke (折れ曲ら) te (せる) p (もの)] 花莖・地上部 《美幌》
- (16) **ukonketep ikkewe** 「ウコンケテビッケウェ」 [ukonketep (オオバコ) ikkewe (の腰骨)] 花莖・地上部 《美幌》
- (17) **ukonkepettep** (u-kón-ke-pet-tép) 「ウコンケペツテナ」 [u (互) ko (に) konkep (折れ曲ったもの) ette (よこす) p (もの)] 花莖・地上部 《足寄》
- (18) **enkopi** (én-ko-pi) 「えンコピ」 [en (私) ko (の方に) pi (引く)] 花莖 《足寄》

注 2. — 本來わ, たぶん eúkopip [e (それで) u (互) ko (に) pi (引く) p (もの)] であった。それが民衆語原解によって émkopi [émko (半分) pi (引く)], 或いわ énkopi ["わが方え引っぱる"] となったのであろう。

(参考) 上記諸名稱の内, (1) から (9) までわすべて鼠に關係している。なぜに「鼠の草」なのか老人に聞くと, 穂が鼠の尾に似ているからだと答える。この穂(穂状花序)を各地で尾又わ陰莖に擬する。(2), (5), (6) の名稱の語原わそれとける。(4), (9) わ水芭蕉の葉に似て小さいからそう名づけたのであろう。(10) から (18) までの名稱わ遊戯にもとずいた名である。すなわち, 子供らわこの植物の花莖の一定数ずつ (10 本なら 10 本とあらかじめ決めておいて) 持ちより, 1 本ずつ折り曲げて相手のに引っかけて引っぱりあい, ちぎれた方を負けとする遊びをした。幌別でわその遊びを u-ko-konchi-etaye (互・に・帽子を・引く) と云った。又, 種々の戯技に於て先攻者を決めるのにこの花莖を用いて「くじ引き」をしたが, それをもやはり「ウココンチエタイエ」と云った。それによって, 語原わ「ウココンチエタイエ」[u (互) ko (に) kunchi (くじ) etaye (引く) p (もの)] であったことが分る。それが「ウココンチエタイエナ」(帽子を引きあうもの) となったのに就いてわ, この葉をおできの頭に貼って膿の芯を吸い出した土俗に關係があった。穂別の或老人は「この草でおできの帽子をとるからそうゆう名がついたのだ」と云っている。またそれが「犬を引きあうもの」となったのわ花莖をひっかけて引き合うのが犬の交尾の姿などを聯想

させたからであろう。

樺太でわ、できもの (asispe) はれもの (huxpe) にこの葉を何枚も炙って重ね、何度もそれを取換えて熱をとったり膿を吸い出したりした。冬は乾し貯えてあったものを水に漬けて使った。小便ずまりにわ細長い莖を取って来て尿道にさし入れ、痔や脱肛や白癬などにわ全草を煎じてその湯で患部を洗った (白浦)。

§ 54. キムラタケ オニク *Boschniakia rossica* Hutt.

(1) eha (e-há) 「エハ」 全株 《真岡、白浦》

(2) 『エバー』 《B, E, F》

(参考) 傳説の中で女神の食うものとしてあり、今でもこの植物が何處其處にあると聞けば、わざわざ廻り道をして避けて行く (真岡)。傷の痛み腫物の痛みが烈しい時、磨り潰して附ける (白浦)。鈴木重尙著『唐太日記』の松浦竹四郎註に、“ロレイの土人アカライが云へるは、是は夷言エバーと云って、東海岸の土人は撲傷・折傷・^{ウサミツキ}金創等に是を搗碎きて附るに、其効驗著しと”、とある。

§ 55. ウンラン *Linaria japonica* Miq.

文献にわ次の様に出ている。

(1) *Yuk-toma-pake, Yuk-toma-baki, Yuk-toma-bakki* 《B, E 樺太》

(2) 『スワツ』 《F 樺太》

§ 56. エゾヒナノウスツボ *Scrophularia Grayana* Maxim.

辭書に *Katuwa* とあり、詳表によれば採集地「厚岸」となっている。辭書わ他に樺太の語として *koikara-kina* を挙げている。

§ 57. エゾノカワジサ *Veronica americana* Schwelin.

(1) hura-yuxke-kina (hú-ra-yux-ke-ki-na) 「ふラユッケキナ」 [húra (臭) yúxke (強い) kiná (草)] 莖葉 《白浦》

(2) kamuykew-kina (ka-múy-kew-ki-na) 「カむイケウキナ」 [kamúy (病魔を) kewé (追う) kiná (草)] 莖葉 《白浦》

(3) peru-kina (pé-ru-ki-na) 「ペルキナ」 [peru (沼地) kina (草)] 莖葉《白浦》

(参考) この莖葉を風邪・肋膜炎等の際に煎じて飲んだ。《白浦》

§ 58. エゾノクガイソオ *Veronica sibirica* L.

(1) mosospe-kut (mo-sós-pe-kut) 「モソシペクツ」 [蛆・圓棒狀莖] 莖 《A 十勝》

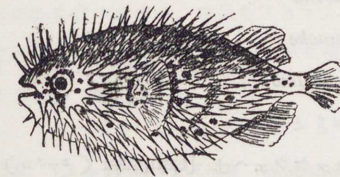
(2) seta-sar (se-tá-sar) 「セタサル」 [犬・尾] 花穂 《A 千歳・石狩》

(3) umma-sar (úm-ma-sar) 「ウマサル」 [馬・尾] 花穂 《A 沙流》

(4) *Ki-ushi-kina* 「キウシキナ」 《B》

§ 59. マンダラゲ (チヨオセンアサガオ) *Datura alba* Ness.

(1) ikaripopo (i-ká-ri-popo) 「イカリポポ」 蒴果 《幌別》



1. ikaripopo (ハリセンボン)



2. ikaripopo
(マンダラゲの蒴果)

注 1. —ikaripopo わハリセンボン (*Diodon holacanthus* L.) のこと。この蒴果わ表面が短い刺で蔽われていてハリセンボンに似ているのでその名がある。

(2) *ikaripopo-kina* (i-ká-ri-po-po-ki-na) 「イカリポポキナ」 [イカリポポのなる草の義] 莖葉 《幌別》

(参考) 頭痛の際この植物の葉を取って炙り額に貼って上から鉢巻をした (幌別)。

§ 60. イヌホオズキ *Solanum nigrum* L.

epotpochi (e-pót-po-chi) 「エポッポチ」 漿果 《長萬部》

§ 61. タバコ *Nicotiana Tabacum L.*

- (1) **tampaku** (tám-pa-ku) 「たンパク」 [＜日本語 “たばこ”] 葉 《幌別》

注 1. — 煙草をのむことを, “tampaku ku” (タバコを, のむ), またわ i-ku (それを・のむ) とゆう。日本語のタバコがアイヌでわ「タンパク」と語尾が「ク」になったのわ, 単なる音韻變化でなく, “のむ” とゆう意味に引かれた民衆語原解の結果である。

注 2. — アイヌ語の ku わ普通 “のむ” と譯されている。しかし, 日本語の “のむ” わ非常にばくぜんとしていて, (イ) 水や酒の様な液體をのむことにも, (ロ) 煙草をのむことにも, (ハ) 固形物を嚥下することにも使われる。アイヌ語の ku わ (イ) と (ロ) の意味にしか用いられず, (ハ) にわ「ルき」 ruki とゆう別語を用いる。日本語・アイヌ語・英語を相互に對照して見ればこの關係がよく分るであらう。

のむ……………	{	ku ……………	to drink
			to smoke
		ruki……………	to swallow

注 3. — 辭書にわ Tambako 『タムバコ』 とある。

- (2) **tampaku ikkewehe** 「たンパク いッケウェヘ」 [tampaku (タバコ)

ikkewehe (の腰骨)] 莖 《幌別》

(参考) 幌別でわもと煙草を栽培した。その種子がこぼれて各所に自生のものが最近まで見うけられた。前者を「アエトイタ・タンパク」 aetoyta-tampaku [a (我ら) e (それを) toyta (耕作する) tampaku (煙草)], 後者を「ヤイツッカ・タンパク」 yáytukka-tampaku [自ら生えた煙草, yay (自分を) tuk (生え) ka (させる) tampaku (煙草)] と稱した。乾燥したものわ葉と莖とを別にし, 葉は更に大小を選別して別々に束にした。大きい束を「ルネ・チマワリ」 rúpne chimawari 小さいのを「ぼン・チマワリ」 pón chimawari と稱した。チマワリとわ葉を 10 枚位ずつ重ねて端を縛ったものをゆう。使う時わこれを刻む。これを「たンパク・フンパ」 tampaku humpa とゆう。タバコの葉だけでわ強すぎるので, それにヤマブドウの葉などをまぜてのむ。煙草わまた傷の消毒に用いる。耳たぶに耳輪を下げるための穴をあけた時

は必ずタバコの莖 (「たンパク・イッケウェヘ」 támpaku ikkewehe) をさしておく。

§ 62. イガホズキ *Physalisstrum echinatum Makino*

ekatchimpe (e-kát-chim-pe) 「エカッチンペ」 [ekatchi (こども) -ipe (たべもの)]

漿果 《長萬部》

(参考) こどもらがこの漿果を取って食べた (長萬部)。

§ 63. ホズキ *Physalis Alkekengi L. var. Francheti Makino*

forma *Bunyardii Makino*

- (1) **chiukumaw** (chi-ú-ku-maw) 「チウクマウ」 [chi (我々が) ukú (吹く)

maw (漿果)] 果實 《幌別》

- (2) **mu-kuttar** (mú-kut-tar) 「むクッタル」 莖葉 《石狩》

(参考) この漿果に小孔を穿ちそこから内容物を取り去れば球形の小袋を得る。女子わこれを口の中に含み, 空氣を入れてふくらませたり舌で押しつぶしたりして鳴らして遊ぶ。またこの漿果わ骨の痛む所え潰してつける。ひびやあかぎれにも潰して患部えすりこむ (幌別)。

§ 64. ジャガタライモ *Solanum tuberosum L.*

- (1) **kosoymi** (ko-sóy-mi) 「コソイミ」 [＜日本語 “五升薯”] 塊莖 《幌別》

- (2) 『エモ』 *Emo* 《B》

- (3) **nucha-toma** (nu-chá-to-ma) 「ヌチャトマ」 [nuchá (ロシア人) tomá (エゾエンゴサクの塊莖)] 塊莖 《樺太》 → 補註(17)。

§ 65. ナギナタコジョ *Elscholtzia Patorini Garcke*

- (1) **ento** (én-to) 「エント」 莖葉 《幌別, 様似, 本別, 名寄》

注 1. — なお, § 130 の注を参照せよ。

- (2) **seta-ento** 「セタエント」 [犬・エント] 莖葉 《長萬部, 沙流, 鶴川, 穂別, 千歳》 《A 石狩》

(参考) 莖葉を採って来て, 燃えている火の上にかざして一寸炙ってから, 炊きた

ての粥の中に入れて暫くおくと、粥に一種清涼な香氣が移る。また、この莖葉を多量に採集して蔭干にしておき、日常お茶の様にしておき、風邪にかかった際も、これを煎じて飲んだ。山狩や沖漁に行く時、徳利の栓をわざわざこれでする。すると、何日経っても水の味が變らぬとゆう（幌別）。この植物には強い香臭があり、それが病魔を遠ざけるので、これを常用すれば身體を健康に保つことができる、とアイヌを考えたらしい。地方によってこれを植栽した所もあるらしく、次の様な記録が残っている。「……又傍に香薷^{セクセント}を植たり。是は飯に炊て後湯に入香を出し吞が爲に植置とぞ」（松浦「夕張日誌」）。

莖葉の煎汁——ento-usey とゆう—— わ宿酔にも効があると（長萬部）。

§ 66. オドリコソオ

Lamium album L. var *barbatum* Franch. et Sav.

seta-haymosi (se-tá-hay-mo-si) 「セタイモシ」 [犬・イラクサ] 莖葉 《眞岡》

§ 67. エゾハッカ *Menthe sachalinensis* Kudō

(1) kamuykew-kina (ka-múy-kew-ki-na) 「カムイクウキナ」 [kamuy (魔) kewe (追う) kina (草)] 莖葉 《名寄》

(2) 『トイオルシムン』 *Toiorush-mun* (B)

§ 68. カリガネソオ *Caryopteris divaricata* Max.

(1) hura-ruy-mun (hú-ra-ruy-mun) 「ふ、ラルイムン」 [hura (臭) ruy (烈しい) mun (草)] 莖葉 《A 十勝》

(2) hura-wen-kina (hú-ra-wen-ki-na) 「ふ、ラウエンキナ」 [hura (臭) wen (悪い) kina (草)] 莖葉 《A 沙流、千歳》

§ 69. クサギ *Clerodendron trichotomum* Thunb.

soko-ni (so-kó-ni) 「ソコニ」 [＜o-soko-ni ＜o-si-kon-ni, o (尻) -si (糞) -kor (持つ) -ni (木)] 莖 《幌別》

注. —この木特有の臭氣を發するので“尻に糞をつけている木”と呼んだらしい → § 45 参照。

(参考) この木の煎汁で衣服を洗えば虱がつかぬとした。また莖の中の蟲を取り、焼いて小兒の疳蟲の藥にした（幌別）。

§ 70. ムラサキ *Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc.

(1) pewre (péw-re) 「ペウレ」 [＜pe (汁) -hure (赤い)] 根 《芽室、足寄》

注 1. —pehure が pewre になったのわ、いわゆる民衆語原解（縁語牽引）による。pewre わ “若い” とゆう意味の語。

(2) pewre-kina (péw-re-ki-na) 「ペウレキナ」 [ペウレとゆう根のとれる草]

莖葉 《芽室、足寄》 《A 千歳・上川》

注 2. —ムラサキを『ペウレ』、あるいわ『ペウレキナ』とも云うと書いたものがある（北海道廳、舊土人に關する調査、大正 11 年, p. 131）。辭書や詳表にも『ペウレキナ』を擧げて、ただ“ムラサキ”とだけ書いている。しかし、「ペウレ」が根で、「ペウレキナ」わその地上部たる莖葉をさすのであって、この關係を擲んでいないと不都合なことが起る。十勝の芽室で次のような「ウレレク」urekreku “なぞなぞ”を採集した。

kim ta newa toy tum ta uko-re-kor-pe nep ta an?

—kim ta pewrep; toy tum ta pewre.

山でと土の中と同じような名を持っているものわ何ですか？

—山でペウレ（熊の子）；土の中でペウレ（紫草の根）。

「ペウレ」がムラサキの總名でなく、その根だけを表わす名稱だからこそ、土の中にあるもの、と云ったのである。

(参考) 松浦竹四郎の『十勝日誌』に、“眼病（シキウエン）には紫苑（ヘフレキナ）を水に浸して附”とあるが、そこで紫苑と云っているのわ實わムラサキである。この植物の液汁わ赤い色を呈するので、そうゆう色の眼病に効くと信じられたのである。前掲『舊土人に關する調査』（p. 131）に、“根を乾して貯わえ、よく嚙んで細かにし、犬・馬・あるいわ熊の脂にまぜて火傷に塗れば卓効があり、また感冒のため咽喉が痛む時、やはりその根をよく嚙んでその汁を呑み下せば、不思議に痛がなくな

る”とある。

§ 71. ハマベンケエソ *Mertensia asiatica* Macbr.

- (1) 『エライバプシ』 *Eraiba-pushi* (A) (B)
 (2) *ota-kina* (o-tá-ki-na) 「オタキナ」 [ota (砂濱) kina (草)] 莖葉 (眞岡, 白浦)
 (3) *ota-tesma* (o-tá-tes-ma) 「オタテシマ」 [砂濱のテシマ¹] 莖葉 (B 樺太)
 注 1. —§ 20, 注 1 参照。

- (4) *pise-nonno* 『ピセノンノ』 花 (B) (A 沙流)

(参考) 根を洗って叩き潰し油で揚げて食った (眞岡)。

§ 72. ヒロハヒルガオ *Calystegia Sepium* R. Br.

オオヒルガオ *Calystegia subvolubilis* Don

- (1) *ken* 「ケン」 根 (十勝, 釧路, 北見, 上川, 天鹽)
 (2) *kittes* (kit-tes) 「キッテシ」 根 (幌別)
 (3) 『キテシ』 *kitesh* (B) (A 沙流・鶴川・空知)

(参考) 早春, 根を掘りそのまま煮て油をつけて食い, 或いわ割んで飯に炊きこんで食った。根を掘る時, 前方に人の立ちふさがることのない様に警戒し,

キッテシ	kíttēs	ヒルガオの根
キッテシ	kíttēs	ヒルガオの根
ドゥルルケ	túrurke	きれずに續け
ホイヤア	hóyyaa	ホイヤア
ドゥルルケ	túrurke	きれずに續け

と唱えながら掘って行った (幌別)。

§ 73. ハマヒルガオ *Calystegia Soldanella* R. Br.

pisun-kittes (pi-sún-kit-tes) 「ピサンキッテシ」 [pis (濱) un (にある) kittes

(ヒルガオの根)] 根 (幌別, 沙流)

(参考) 前條のものと同様, 根を食った (幌別)。

§ 74. イケマ *Cynanchum caudatum* Maxim.

- (1) *ikema* (i-ké-ma) 「イケマ」 [i (それ) -kema (の足)] 根 (《日常語——北海道・樺太》)

注 1. —kamuy-kema (神の足) の義であらう。kema わよく草の根をさす。

- (2) *sinrit* (sin-rit) 「シンリッ」 [sinrit (根)] 根 (《美幌》)

注 2. —北見國網走郡に「シンリトナイ」という地名がある。蝦夷語地名解にわ見えないが, sinrit (イケマの根) -o (たくさんある) -nay (澤) の義である。

- (3) *penup* (pé-nup) 「ペヌ」 [pe (汁) -nu (持つ) -p (もの)] 根 (《雅語——北海道》)

注 3. —ikema を日常語に用いる所でわ penup を雅語に用いるが, 美幌・屈斜路などでわ日常語に penup を用い, 雅語にわ sinrit を用いる。

- (4) *ikema-chippo* (i-ké-ma-chip-po) 「イケマチッポ」 [イケマの・小舟] 蓇突の果皮 (《幌別》)

- (5) *penup-epuy* (pé-nu-pe-puy) 「ペヌエプイ」 [イケマの頭] 蓇突 (《美幌》)

(参考) この根わアイヌ生活にとって, きわめて重要な意義を有していた。アイヌわこの根を食べたが, またそれに猛毒があることも知っていた。

先ず, その根を塩の熱灰の中に埋めて焼いて食った。また, 根を掘って來たらよく洗って, 鍋底に箸を敷き, その上にそれを並べて煮た。但し, 猛毒を有するので食べ過ぎることのないように警戒した。親指位の太さの 9~12 cm 位の長さのものを二つも食べれば中毒を起す。中毒することを *hóski* (幌別) *yóski* (屈斜路) とゆうが, いずれも原義わ「酔う」とゆうことである。

いっばんに, 「たんぱ・ケヤッ」 *tán-pa keyát* (年内に掘った根) わいいが, 「リヤ・ケヤッ」 *riyá keyat* (越年した根) わ危いとされていた。また, 焼いたり煮たりしたのを指の中で絞って見て, 「いるッ」 *irúp* (澱粉) のはみでるのわいいが, 「ペヘ」 *péhe* (その液汁) の出るのわ不良だとされていた。

中毒を起したら, 幌別でわ, 患者の両手を持って走らせたり, 頭を毛を禿げるほど毛り取ったり, 人糞を食わせたりした。

美幌でわ、「ペウレナ・ヨシキ」péwrep yóski (イケマに中毒)したら、「おいッセカ」oisseka (酔をさます)と云って、患者の両手を取って、

penup tampu (pé-nup-tam-pu)	イケマの栓よ
hee tampu (hé-e-tam-pu)	おゝその栓よ
hee mawe (hé-e-ma-we)	吐く息とともに
hee hasi (hé-e-ha-si)	すばんと抜けよ

と唄いながら、烈しく踊り廻った。風斜路でも、イケマに酔った者 (penup yoski-p) を眠らせたらそれっきり死んでしまうと云うので、患者を抓ったり叩いたり、両側から患者の腕を取って持ちあげ持ちあげ、

penup tampu (pe-nup-tam-pu)	イケマの栓よ
hee tampu (he-e-tam-pu)	おゝその栓よ
hee mawe (he-e-ma-we)	吐く息とともに
hoo asin (ho-o-a-sin)	すばんと抜けよ

と唄いながら、汗だくで踊った。

イケマわ、それを食べた人の大便でさえも、犬が食うと死ぬとゆう。それほど猛毒をもち、人や犬を中毒させたり、死なせたりするので、アイヌわ、この植物に偉大な靈能を認め、きわめて種々の呪法に用いたのである。

例えば、それを悪魔ばらいに用いた。山や沖え行く時わ、必ずその乾燥したのを携行し、それを噛んで頭や胸につける。すると魔神わ恐れて近ずかぬとされていた。

白濱でわ、沖狩に出て獲物を見かけたら、それを撃つ前に、これを噛んで吹きつけながら、次の様に唱えた。

e-sampekoro	汝どんなに気が強か
anaxkayki	ろうとも
tan kusuri nampe	この薬わ
axkari yuxke ram	それ以上強い氣を
koro koyakus-pe	持てぬものだ

こう唱えれば、どんな荒い獣でもおとなしくなるものだとう。

幌別でわ、この根を ikema とも penup とも云うが、前者わ日常語で、後者わ沖嗣である。佐藤三次郎著「北海道幌別漁村生活誌」(p. 60)の中で、アイヌの漁師が

こう云っている。“沖にいる間は……イケマのことわベヌプ (penup) とゆうんだ。今俺考えて見ると、このベヌプってゆうのわ、水の中で効くもの、ってゆう意味なんだな。” また同書 (p. 63) に、カジキマグロを鰓で突いた後、その鰓にイケマを噛ってブウッと吹きかけてやること書かれている。この地方でわ、沖狩に出て獲物を鰓で突きとめたけれども、それが猛烈に荒れまわる時わ、イケマを水で噛んで霧を吹きながら、

sumumke	早く死ね!
sumumke	早く死ね!

と呪詛をかけた。

天氣直しの呪法——北海道南西部でわ「シラシケ」siraské, 北海道北東部及び樺太でわ「シラシカ」siraska とゆう——にもこれを用いた。例えば、イケマを薄く切ってその薄片を串にさし、その一方の面を黒く焦して、それを風の吹いて来る方向え向けて立てておくと風が止むと信じていた (幌別)。

樺太でわ、沖に出て時化に遭った時、これを噛んで、

e-ramu	お前の心を
an-rayke	殺したぞ!

と唱えて吐き出せば、風波も止み、雲霧も収まると信じていた (真岡)。これも風伯の氣を殺ぐのである。この信仰がアイヌの説話の上にも影を落していて、アイヌ神話の中に、人祖神オキクルミがイケマの小弓と小矢で北風の魔を懲らす話が出ている (金田一京助, アイヌの神典, p. 134~5)。

また、これわ人の氣をも鎮める力を有している。例えば誰か怒っている人の所え行く際わ、その家の近くまで行ったらイケマを噛んで、密かにその人の名を呼びながら、

e-ramu	お前の心を
an-rayke	殺したぞ!

と唱えて吹きつける (epúrise) と、相手の氣わ鎮まっているものだとう (真岡)。

病魔を退けるためにも盛んに用いた。悪疫流行の際わ、ギョオジャニニクとこのイケマに削花を添えて、ハマナスの木に結び付け、入口に立てた。又、ギョオジャニニクとイケマを少量ずつ木綿の布に包んで、子供の着物の衿首に縫い込んだり、或

いわ pénup-rekutumpe (イケマの首飾) と云って、イケマだけ丸く玉にして真中に穴を明けて糸を通し、首から下げたり、衣服の胸に縫い下げたり、老婆わ ikéma-e-pa-sina (イケマ・で・頭・縛る) と云って、イケマを輪切りにしたものを鉢巻の中にしたみこんだり、首飾などに縫いつけたりした (名寄、白浦)。

pénup-rekutumpe (イケマの首飾) とゆうのわ、悪疫流行の際子供等が首から下げるもので、ináw (割り花) で縄をなってイケマを通し、そのイケマが胸の邊りに来る様にして子供の衿首の所で結ぶものである。用済みになったら暫くの間枕 (múkru, chiéninnuype) の間に入れておき、やがて火の神え戻すと云って爐の中に入れて燃してしまう (名寄)。

また、これを嚙んで病人に吹きかけたり、家の内外に霧を吹いて廻ったりした。心掛けのいい老婆などわ、悪疫流行の時わ、毎晩缺かさず家の周囲を吹いて廻った。そうゆう際わ必ず唱えごとをするものであるが、次にその一例を示す (幌別)。

nep reraha	どんな魔の風
nep taskori	どんな魔の氣が
an wa ne yakka	襲って来ようとも
hura-ruy-kina	臭の強い草
e-ne ruwe ne	のあなたです
e-kor hura	あなたの臭
hura mawehe	臭の風を
tapan chasi	この家の
puray kari	窓から
apa kari	戸から
e-sanke hine	吹き出させて
nep mawehe	どんな魔の風
nep taskori	どんな魔の氣が
an wa ne yakka	襲って来ようとも
tapan chasi	この家
e-haytare	に近よらせず
tuyma mosir	遠い國

sisam mosir 異人の國

ko-oputuye! に追いやって下さい!

腹痛や下痢の際、或いわ蟲下しにわ、少量を生のまま嚙んで呑み、頭痛の際わ焼いて布に包んで鉢巻にし、眼病 (眼を打ったり開かなかったりする時) にわ、寝る前に嚙んで顔につけて寝た。濃く煎じて傷を洗うと化膿しなかった。蟲齒の痛みにもこれを嚙んだ。

また、馬の薬になるとも云われているが、これわ、イケマがたまたま「生け馬」に通じる所から、日本人がこれを馬の薬であるかに云い傳え、その信仰がアイヌに輸入されたものであるらしい。

これを悪用するものもあった。例えば、悪い女などわ、男に會った時、密かにこれを嚙んで男の一物に塗りつける。そうすると男わ“陰萎になる” (oráy, o 陰部, ray 死ぬ) とゆう (眞岡)。北海道でも、男の坐る所或いわ寝ている床の下にこっそりこの根を入れておくと、陰萎するとゆう (名寄)。

このように偉大な靈力を有するので、所によってわ「ベヌツカムイ」penup kamuy (イケマ神) などと崇められ、どんなアイヌでも、どこの家でも、必ずこのイケマわ乾し貯えておき、旅行に出る際にも忘れずに持って行ったのである。この蕾突 (英 follicle) わ成熟後開裂して舟形を呈するので、子供らわそれを探って、小舟 (chippo) だと云って水に浮べて遊んだ (幌別、美幌)。ikema chippo [イケマ小舟] とゆうのわ、この遊戲に基づいた名稱である。

蕾突内の綿わ傷薬にした (美幌)。

§ 75. カガイモ Metaplexis japonica Makino

(1) **chituyrep** (chi-túy-rep) 「チと[°]イレツ」 [chituyre (ちぎれる) p (もの)] 根 《長萬部、幌別》 《A 沙流、鷗川、石狩、千歳》

注 1. —この植物の根わ地中に深く入りこんでいるので掘り出すとき容易にきれるからその名がある。

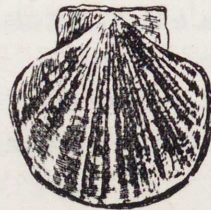
(2) **chituyrep-chippo** (chi-túy-rep-chip-po) 「チと[°]イレツチップ」 [カガイモの小舟] 蕾突の開裂した果皮 《幌別》

(3) **hakketek** (hák-ke-tek) 「はッケテッ」 [hakketek (帆立貝の貝殻)] 蕾突の

開裂した果皮 《足寄》

注 2. — 開裂した果皮が帆立貝の殻に似ているのでこの名がある。

(4) epunkaw (e-pún-kaw) 「エブンカウ」 種子 《穂別》



1. hakketek (帆立貝)



2. hakketek (カガイモの
蓇葖の開裂した果皮)

(参考) バチラ博士の辭書にわ「この莢をアイヌはしばしば生で食う。余はこの植物の生な莢を食べすぎて瘧れんを起し、口から泡を吹いている若者を見たことがある。根は普通煮て食う」「この植物の根は非常に深く走り、そして食糧として掘り出されるが、食べすぎると中毒をひき起すとゆう。莢を多く食べると腹が痛くなる」とある。

§ 76. オシヨロソオ *Apocynum B. sikurumon Hara*

辭書に *paskuru-mun* とある。páskur (鵝)・mun (草) の義に解される。莖葉を云ったものであろう。語原に就いてわ、「長い地下莖を出す草」の義とする説も出ている(宮部金吾, アイヌ植物名に就いて, p. 7)。しかし、語義の上からちやうど解釋の成り立つ餘地を全くないのである。

§ 77. オヤマリンドオ *Gentiana Makinoi Kusnez.*

(1) 『キオシュッ』 *kioshut* (B)

(2) 『ケウシュッ』 *keushut* (B)

§ 78. エゾリンドオ *Gentiana axillariflora Lev. et Vnt.*

『ヌテッカラキナ』 (F)

§ 79. ヤチダモ *Fraxinus mandshurica Rupr.*

(1) pin-ni 「ピンニ」 [pir (傷) ni (木)] 莖 《北海道, 樺太》

注 1. — 語原ははっきりしないが、この木の皮を後に説く様に文身の際傷を洗う薬液をつくるのに用いられているので、或いわ pin-ni わ pir-ni 「傷・木」だったかもしれない。またこの木が割れやすいので、割って薪や器具器材をつくるのに盛んに用いられる所を見ると、或いわ pinni < pen-ni < per-ni 「割れ・木」だったかもしれない。その他に、この木は世界で二番目に作られ、森の中で一番背が高いので、ピンニすなわち男の木と呼ばれたとする説もある(コタン生物記)。「ヤチダモを pinni (男性の木) と云っているが、これに眞直に喬木に成長するからである」とも説かれている(宮部金吾「アイヌ植物名に就いて」)。しかしながら、ピンニをそのまま男の木の意味にわならない。男の木ならピンネ = pinne-ni でなければならぬ。

(2) pinni-yar (pin-ni-yar) 「ピンニヤル」 [ヤチダモの裂片] ヤチダモから剥ぎとった樹皮 《美幌》

(3) yachi-tunni (ya-chi-tun-ni) 「ヤチドンニ」 [濕地の・カシワ] 莖 (濕地に生えている小さい瘦せたヤチダモ) 《真岡》

(参考) この木の割材で仔熊を飼う檻 (eper-set) や高倉 (pu) や川を登る鮭を取る梁 (tes) をつくる。またそれを薪にもする(美幌, 屈斜路)。また舟や櫓をつくる(名寄, 樺太)。この皮を文身をする際傷口を洗う薬液をつくるに用いる(→p. 48 §)。底豆の治療にわこの木を焼いて灰を取りその灰を器物に入れて湯を注ぎ微温湯をつくって患部を浸すと早く口がつく (H)。

§ 80. アオダモ *Fraxinus Sieboldiana Bl.*

iwani (i-wá-ni) 「イワニ」 [iwa (山地) ni (木)] 莖 《全北海道》

(参考 1) この木が弓・器具の柄・焚木などに用いた(幌別)。よく燃えるので山の神の松明などとも云われた(白老)。皮を取って水に入れると青くなるので、その木を染料に使った(屈斜路—D, p. 7)。標茶・塘路附近のアイヌオホヒョオの皮をはいで温泉に入れて漂白し、それをタモの木とハンの木で染めるとあるが(河野廣

道、アイヌの織物染色法)、そのタモの木とゆうのわアオダモのことでわなかるゝか。

この皮わ文身をする時の染汁を作るのにも用いた。文身をするにわ、まず適当な場所を選んで臨時の爐をつくる。入口の土間とか、天氣のいい日なら戸外の風の當らぬ場所とかを選び、ふだん物を煮炊きする屋内の爐を避ける。ただ、やむを得ない時にかぎり、屋内の爐の、ふだん火をたくことのない火尻の一隅を選んで、そこを清めて使うこともある。

爐が出来たら、その上に、小鍋に水を入れてかける。この小鍋わ、あらかじめよく洗って鍋底の墨などわすっきり落しておく。

小鍋の中にわ、水だけのこともあるが、多くわ、アオダモやヤチダモの皮を刻んで入れたり、まれにわミズキ、クロウメドキ、クワなどの皮、或いわヨモギの葉、ハマナスの根などを入れたりする。千歳でわ、黒豆を入れたとゆう例もある(兒玉作左衛門・伊藤昌一、アイヌの文身の研究)。

幌別でわ、エゾニワトコの年内に伸びた若枝を 9cm. 位に切って入れた。

これらの材料わ、鍋の中で煮立てずに、別の容器に入れておいて、小鍋の湯が煮立った時に、それえ注いで浸出液をつくることもある。その液汁を「ペエ」(pé-e 物の汁)、「ペヘ」(pé-he 同前)、「ペエ・ワッカ」(pée-wakka 物の汁・水)と稱する。この液汁わ、後に手術部位の消毒や血止に用いる。

小鍋を沸かすにわ、北海道でも樺太でも、一般にシラカンバの皮を焚く。この皮わ火をつけると黒煙をあげて燃え、小鍋の底にまっ黒な油煙をつける。この油煙わ、文身の染料に用いるためのものである。

幌別でわ、シラカンバの油煙わ、傷の治りがよくないと云って、ホノキやノリウツギの枯枝を焚いて油煙をつくる者もあった。

この鍋底についた油煙を、「シュパシ」(sú-pas 鍋・墨)とゆう。日高の或地方でわ、黒曜石の様な綺麗な石をよく洗って、まだ濡れているうちに爐に掛けて、下からシラカンバの皮を焚いて油煙を取った(兒玉・伊藤、上掲論文)。それを「シュマパシ」(suma-pas 石の・墨)と云った。

文身を施す際わ、施術者わ被術者と向いあって坐る。被術者を仰向けに寝かせることもある。施術者わ、まず黒木綿の小片を前記の液汁の中に浸して、それで施術しようとする部位をていねいに拭う。ヨモギの葉の浸出液(「ノヤペヘ」noya-pehe ヨモ

ギ・の汁)を用いる場合わ、直接ヨモギの葉を液の中から取り出して、それで拭う。それから、指先に鍋底の油煙をつけて、それで文身を施そうとする部位に、模様の下書きをする。そしてその上を刃物の先で横に小さな浅い傷を無数につけて行く。その際に使う刃物としてわ、北海道南西部でわ剃刀、中東部でわ「エビラ」(epira)と稱する先の細い小刀、樺太でも「エブリケヘ」(epirikex)と稱する同様の小刀を用い、いずれの場合でも布で巻いて先だけ出しておく。「エビラ」も「エブリケヘ」も同じく「それで傷をつけるもの」の意味である。辭書に「アンチピリ」「文身の痕跡」とあるが、anchi-piri わ“黒曜石・の傷”の意味であるから、昔わ黒曜石の小刀の先で文身の傷をつけたのである(→参考2)。この刃物わ時々前述の浸出液に浸しながら使う。また、傷から浸み出る血をもそれでぬぐい、そのたびに油煙をすりこんで血が止まるまでそれを繰返して行くのである。この浸出液にアオダモの皮を刻んで入れるのわ、黒豆を入れたり、黒木綿の小布を使ったりするのと同じく、文身の色を濃くしようとする意圖に出たものであろう。

(参考2) 前文で文身のことを説いた際、それに關聯して黒曜石の小刀に言及したが、ついでにそのことをもう少し詳しく述べておこう。

小刀を意味する語わ種々あるが、その中で最も普通なのわ makiri とゆう語である。この語わ、もともと物と共に日本内地から北海道に持ちこまれ、漁場請負制度の發達と共にアイヌの間に普及したのであって、北海道わ勿論のこと、樺太、千島のアイヌにも用いられ、遠くアレウトの語彙にまで取り入れられている。しかし、この語が千島に入ったのわ、そんなに古いことでわない。明治32年(1899 A.D.)に島居龍藏博士が北千島のアイヌを調査された際、彼等わ小刀を eperaniki と云っていたとある(千島アイヌ, p. 147)。それわしかし島居博士の誤解で、eperaniki わ單語でわなくて、おそらく“epera ani ke”「小刀、を以て、搔く」とゆう文だったと思われるから、小刀を意味する千島アイヌ語わ、epera だったにちがいない。——ついながら、小刀わもと“切る”ものでわなく“搔く”ものだったらしい。木を削ってイナウ(削り花)を作ることも“inaw ke”「削り花を搔く」とゆう云い方をするのである。これわ、後に説く様に、アイヌの小刀が最近まで黒曜石などの碎片で作られた石庖丁だったことと大いに關係があるのである。

千島アイヌわ、「エペラ」の他に、「マキリ」とゆう語も知っていたが、それについて

てわ北海道のアイヌ語だとゆう明かな意識をもっていた。“Makiri とも云えどこれは蝦夷アイヌ語なりと云ふ”と鳥居博士わ報じて居られる(前掲書 p. 147)。

ところが北海道のオホツク海沿岸に來ると、斜里でも網走でも *epira* とゆう語があつて、古老わそれを古語として記憶している。海岸から奥地え入って、屈斜路や足寄あたりえ來ると、「マキリ」とゆうのわ日本人のことばで、それが流行しだしたのわ今居る古老の少年の頃からであり、その頃わ「エビラ」とゆう語を日常使ったとゆう。

北海道も南の方、日高や釧路え來ると、もっぱら「マキリ」だけが記憶され、そのアイヌわそれを固有語だと主張してやまない。しかしながら、寛政3年(1791)に菅江眞澄が虻田でエビラとゆう語を拾い上げているから(『蝦夷廻天布利』)、この地方でも約160年以前にわエビラとゆう語が用いられていたことが分るのである。

古い文獻、例えば寛永7年(1630)の蝦夷談筆記上巻、正徳5年(1713)の松前志摩守差出候書付などにわ、小刀を「エイワケ」「エイワキ」としてある。*eiwanke-p* “使用する・もの”であろう。享保5年(1720)の蝦夷志にわ伊牙烈布(イケレップ)とある。*i-kewre-p* “物を・削る・もの”の義であろう。その他、蝦夷記とゆう本にわ短刀をエヒリケとしてゐる。これわ明かに *e-pir-ke-p* “それで・pir(傷)・搔く・もの”の義であつて、今でも樺太アイヌわ「エビリケへ」*epirikex* と云つて、女持ちの細い小刀を稱している。

epira, *epera* など、それと同じく、*e-pir-a-p* “それによって・pir(きず)・つく・もの”、或いは *e-per-a-p* “それによって・per(裂け)が・つく・もの”の義だつたと考えられる。傷を意味する *pir* わ、もともと *per*(裂け)から來た語であつて、本來わ裂け傷を意味したらしい。それわ鐵製のマキリですうと切った傷でわなくて、石庖丁などでごしごし擦ったり搔いたりした傷であつたと思われる。先に挙げた *i-kewre-p* “物を・削る・もの”の *kewre*(削る)なども、すうすうと削ることとわなく、ごりごりがり搔き削ることである。*epera*, *epira*, *epirikex* わもとわその様な刃物だつたのであつて、もとわ石庖丁であつたにちがいないことわ、名稱の上からも察しられるのである。

木幣なども、今の様な *kike-parse-inaw*(削り掛けが・ばらばらに垂れた・幣)とか *kike-chinoye-inaw*(削り掛けを・擦った・幣)とかが出来たのわ、鐵製の小刀、

すなわち「マキリ」が入ってからであつて、それ以前わもっぱら棒幣であり、それわ棒に石庖丁の刃を直角に當てて引き搔き、數箇所に搔き綿の小塊をつけたものであつたと考えられる。その様な方法で作つた搔き綿を、北海道でわ *ni-maw* またわ單に *maw*、樺太でわ *ro-chi* と云つて、われわれに於けるタオルやガゼや脱脂綿の如く、濕布ぎれに用いたり出血の場所に當てて縛帶したりするのに用いる。それわ古い時代の幣と幣作りの技法の残存である。幣を作ることを“*inaw-ke*”「幣を・搔く」とゆうのも、その古い技法を示すものであり、また削り掛を *inaw-kike* とゆうのも、語原わ *inaw-ke-ike* “幣を・搔いた・もの”の義であつて、やはり上記の推測を裏書きするものである。

マキリわもともと日本渡來の鐵製の小刀であつた。それわ最初漁場で魚を處理するのに用いられた。當時の漁場の勞働力わ殆どアイヌであつたから、それらのアイヌが漁季すぎて歸郷する際、それを自分の村に持ち歸つたのであろう。この様にしてマキリわアイヌに普及したけれども、それでも漁場に遠い奥地でわ、比較的近い頃まで石の小刀、すなわちエビラまたわエビリケを使つていたらしい。バチラ博士が十勝で一人の老婆に會つた際、彼女わ文身をさして「アンチピリ」と云つたとゆう。*anchi-piri* わ「黒曜石の傷」とゆうことであるから、そう古くない頃まであの地方でわ黒曜石の小刀を使つて文身を施していたことが分るのである。

それでわその黒曜石の小刀とわ、どの様な形狀のものであつたろうか。

樺太で「エビリケへ」と云つてゐるのわ、既に述べた様に、女持ちの細い小刀である。それが一層細くなつて、針の様になつたものに「ケメビリケへ」(*kem-epirikex* 「針の・傷をつけるもの」)と稱する小刀があつて、これわ神話に出て來る「オヤシ・イコンノ」(*oyasi-ikonno* 「ばけもの・婆」)の腰に下げる物とされている。おそらくそれが化物婆の腰にぶらさがる以前わ、アイヌのメノコの腰に下げられていたのであろう。そして文身を施す際わ、その細く尖つた先を利用して、皮膚に浅い裂き傷を無數に作つたにちがいないのである。

§ 81. オオバイボタ *Ligustrum ovalifolium* Hassk.

epotanni (*e-pó-tan-ni*) 「エポタンニ」[→§ 82] 莖 《A 千歳》→補註(18).

§ 82. エゾイボタ *Ligustrum yesoense Nakai*

- (1) **epotanni** (e-pó-tan-ni) 「エポタンニ」 [e (それに) potar (病魔を追い出すことを頼む) ni (木)] 莖 《A 千歳》
- (2) **ipotanni** (i-pó-tan-ni) 「イポタンニ」 [<epotan-ni] 莖 《幌別》
- (参考) 突き眼をした時、この葉をもんでその絞り汁に人乳をまぜ、眼の中に入れた(幌別)。この木で箸を作って常用すれば蟲齒を防ぐ(B)。

§ 83. ハシドイ

Syringa amurensis Rupr. var. japonica Franch. et Sav.

- (1) **punkaw** (pún-kaw) 「ポンカウ」 莖 《北海道全地》
- (2) **pus-ni** (pús-ni) 「プシニ」 [はねる・木] 莖 《美幌、屈斜路》
- 注 1. —美幌や屈斜路でも改まった言葉(祈詞など)でわ punkaw とゆう語を使う。ただ、この木わ、火にくべればパチパチと pus (はねる) するので、日常語でわ pus-ni (はねる・木) とゆうのである。
- 注 2. —沙流地方でわこの木の神名を itak-ruy-kur (おしゃべりする・神) itak-ruy-mat (おしゃべりする・婦人) と呼ぶ。やはり、これを火にくべればパチパチと勢よくはねながら燃えるからである。
- (参考) この木で家内の守り神である「チセコルカムイ」chise-kor-kamuy (家を・所有する・神) の御神體、すなわち「ソパウンカムイ」so-pa-un-kamuy (座・頭・の・神) 或いわ「ポンカウトノ」punkaw-tono (ハシドイ・殿) と稱する木幣を作った(沙流)。また、この木で家材(特に柱)を作った(幌別)。柱をも作ったし墓標をも作った(名寄)。この枝で「ふッタッ」sittap (<sir-ta-p 地を・掘る・もの) と稱する土掘道具や熊祭の時に使う花矢などを作った(屈斜路)。

§ 84. ハクウンボク *Styrax Obassia Sieb. et Zucc.*

『オヨペロニ』 *Oyopero-ni* 《A 千歳》

§ 85. サワフタギ *Palura paniculata Nakai, var. pilosa Nakai*

nimakkani (ni-mák-ka-ni) 「ニマッカニ」 [nimak (齒) kar (治す) ni (木)] 莖 《A 天鹽・上川》

§ 86. オオサクラソオ *Primula jesoana Miq.*

辭書に *abappo*, *apapo* と出ている。この語(正しい形わ *apáppo*) わ釧路・北見で單に花の意味にすぎない。

§ 87. オカトラノオ *Lysimachia clethroides Duby*

- (1) **sirkap-kina** (sir-kap-ki-na) 「スリカキナ」 [メカジキ・草] 莖葉 《幌別・鶴川》
- (2) **pirkar-kina** (pir-kar-ki-na) 「ピリカルキナ」 [pir (傷) kar (治す) kina (草)] 莖葉 《B, E》

§ 88. イソツツジ *Ledum palustre L.*

- (1) **haspo** (hás-po) 「ハシポ」 [has (灌木) po (子, 指小辭)] 莖葉 《屈斜路》 《A 十勝・上川》
- (2) **aspo** (ás-po) 「アシポ」 [<haspo] 莖葉 《美幌》
- (3) **tomamas** (to-má-mas) 「トママシ」 [tomám (沼地) has (灌木)] 莖葉 《膽振, 日高沙流郡》
- (参考) 幌別でわ、この葉をお茶にして飲んだり、粥に入れて味をつけたりした。美幌や名寄でも、それをお茶にしたり、煙草の代りにのんだりした。

§ 89. カバフトツツジ *Ledum palustre L. var. dilatatum Wahlb.*

nuxcha (núx-cha) 「ヌッチャ」 [<nup (野) cha (枝條)] 莖葉 《白浦・真岡》

(参考) 莖葉を煮立てて風邪の時飲み、ふだんもお茶にして盛んに飲用する。それを「ぬッチャチャ」núxcha-cha (イソツツジのお茶) と稱し、客のある際わそれに乾魚をそえて出す(白浦)。→補註(19)。

§ 90. ハナヒリノキ *Leucothoe Grayana Maxim.*

- (1) **aypaskanni** (áy-pas-kan-ni) 「あいパシカンニ」 莖をゆう 《真岡》
 (2) **aypaskeni** (áy-pas-ke-ni) 「あいパシケニ」 莖をゆう 《A 十勝・沙流》《天鹽》
 (3) **ayneni** (áy-ne-ni) 「あいネニ」 [ay (矢) ne (になる) ni (木)] 莖をゆう 《長萬部》
 (4) **aynini** (áy-ni-ni) 「あいニニ」 [<ayneni] 莖をゆう 《穂別》
 (参考) 樺太の真岡でわ、この木で箸を作った。その箸で食べば何を食っても中毒しないとゆう俗信があったのである。a-e-pasuy-kar-ni [われら・それで・箸を・つくる・木] の如き民衆語原解から生じた習俗であろうか。風邪の時、胸の痛む時、この木の削り屑を煎じて飲んだ。天鹽の名寄でわ、矢毒を調製する際、これを混ぜて使ったとゆう。

§ 91. ツルコケモモ *Vaccinium Oxycoccus* L.

- (1) **katam** (ka-tám) 「カタム」 果實 《長萬部、幌別、斜里、樺太 [雅語]》
 (2) **katamka-urep** (ka-tám-ka-u-rep) 「カタムカウレプ」 [katam (<katam-sar ツルコケモモ・原) ka (の) hurep (赤い) 實] 果實 《美幌》
 (3) **huturex** (hú-tu-rex) 「ふドレヘ」 [<hú-turep 生の・果實] 果實 《樺太》
 注. —或いわ、hu わ húre (<hu-ne) の語根で、hu-turep わ「赤い・果實」の義か。

(参考) この果實を一般に生食した。樺太の白浦でわその他に次の様に料理に用いた。

- 1) 生の鱈の肉を鍋で煮てから手で絞り、再び鍋に入れて油を入れて攪拌して、それにこの果實を砕いて入れる。それを「すみミンチカリベ」 súmusmim-chikaripe [<sum (油) us (ついている) mim (魚肉) chikaripe (料理)] と云って賞味した。
 2) 鱈の白子を煮て潰してそれにこの果實を入れて食う。それを「うプシドレヘカリベ」 úpasturex-chikaripe [<up (白子) us (ついた) turex (果實) chikaripe (料理)] と云った。

§ 92. キバナノシャクナゲ *Rhododendron chrysanthum* Pall.

- (1) **riyaham** (ri-yá-ham) 「リヤハム」 [riya (越冬した) ham (葉)] 葉 《幌別》
 (2) **riyahamus** (ri-yá-ha-mus) 「リヤハムシ」 [riyaham (越冬した葉) us (ついている)] 莖 《幌別》
 (参考) 葉を取って乾し、巻いて煙草にした (幌別)。

§ 93. エゾムラサキツツジ *Rhododendron dauricum* L.

haspokewsut (hás-po-kew-sut) 「ハシボケウスツ」 [hás-po (小灌木) kéwsut (伯父)] 《屈斜路》

§ 94. ヤマツツジ *Rhododendron Kaempferi* Planch.

- (1) **ehureppo** (e-hú-rep-po) 「エフレッポ」 [e (顔) hure (赤い) p (者) po (指小辭)] 花 《A 千歳》
 (2) **hureppo** (hú-rep-po) 「フレッポ」 [húre (赤い) p (もの) po (指小辭)] 花 《幌別》

§ 95. エゾクロウスゴ *Vaccinium Chamissonis* Bong.

オククロウスゴ *Vaccinium ovalifolium* Sm.

- (1) **nieri** 『ニエリ』 果實 《G 樺太》
 (2) **ekoton** 『エコトン』 果實 《G 樺太》
 (3) **saxturex** (sák-tu-rex) 「さハドレヘ」 [<sak (夏) turep (木の) 實] 果實 《樺太》

§ 96. イワツツジ *Vaccinium praestans* Lamb.

echichara (e-chí-cha-ra) 「エチイチャラ」 果實 《白浦》

注 1. —千徳太郎治「樺太アイヌ叢話」 p. 23, 「樺太アイヌの重要果實」の章に「エチイチャラ」の名を挙げ、通称アタマハゲとしている。→補註 (20)。

注 2. —バチラア辞書に、*Echiu-chari*, *Echuchari*, *Itchiyara*, *Uchishchara*, *Uchitchara*, *Chikaiba* 等の名をあげ、最後の二つにわ樺太に於ける稱呼である

旨、明示している。菅原繁蔵「樺太の植物」にわ「エッチャラ」、宮部金吾・三宅勉「樺太植物誌」p. 300 にわ「イッチャラ」「ウチチャラ」「エッチャリ」、西鶴定嘉「樺太アイヌ」p. 112 にわ「ウッチャラ」とある。

§ 97. オオバスノキ *Vaccinium Smallii* A. Gray

- (1) **ayekarip** (a-yé-ka-rip) 「アイエカリプ」 果實 《穂別》
 (2) **ayekarip-ni** (a-yé-ka-rip-ni) 「アイエカリプニ」 莖 《穂別》

注。——植物名詳表にスノキ (*Vaccinium hirtum* Thunb.) を表わすアイヌ語として *Aikarip* (十勝川筋) 及び *Aekarip-ni* (沙流川筋) の二語を掲げている。前者はこの植物の果實をさし、後者はその果實の生ずる木の意味で莖だけをさす名稱であることわ明かである。辭書にも *Aekarip*, *Aikarip* と見え、なお樺太でわ *Satturi* とゆうとある。「サツトリ」とわ諸家の報告に見える語であるが、そうゆう語わ實にしない様である。おそらく「さハドレヘ」 *Saxturex* [sak (夏の) turep (果實)] の聞き誤りであろう。千徳太郎治の「樺太アイヌ叢話」(p. 23) に「サハトレヘ」(山葡萄に似たもの) とある。この果實わ食用に供した(白浦)。

§ 98. クロマメノキ *Vaccinium uliginosum* L.

- (1) **chuxturex** (chúx-tu-rex) 「チュッドレヘ」 [＜chuk (秋) turep (果實)] 果實 《樺太》
 (2) **kunne-turex** (kún-ne-tu-rex) 「クンネドレヘ」 [＜kunne (黒い) turep (果實)] 果實 《真岡》
 (3) **sarkatam** (sár-ka-tam) 「サルカタム」 [sar (濕原) katam (果實)] 果實 《美幌》

§ 99. コケモモ *Vaccinium Vitis-Idaea* L.

enonoka 「エのノカ」 果實 《樺太》

注。——バチラァ辭書に, *Enoncha*, *Enonocha*, *Enumkani*, *Enumocha*, *Enumocha-ni*, *Enunuka-ni*, *Inumocha-ni*, *Inunuka*, *Tatanum*, *Satturep*,

Satturi 等、種々の形で見えている。

§ 100. ゴゼンタチバナ

Chamaepericlymenum canadense Aschers. et Graebn.

辭書に *Rehamush* とあり、植物名詳表によれば採集地わ十勝及び上川になつてゐる。「レはムシ」 *rehámus*, 語原わ *riya* (越年する) *ham* (葉) *us* (ついている) で、葉の常緑なのに基いて名づけたのであろう。

辭書にわ他に (1) *chironnu-furep*, (2) *chi-ronnu-fureppo*, (3) *chirunnu-fureppo*, (4) *sekakka* 等の形が見えるが、(1) わ *chironnup-hurep* が正しく「狐の・赤い實」の義、(2), (3) わ *chironnup-hureppo* が正しい形で「狐の・小さい赤い實」の義である。(4) わ *si-kaxkax* [*si* (本當の) *kaxkax* (ゴゼンタチバナの果實)] で *yayán-kaxkax* [*yayan* (ただの) *kaxkax* (ゴゼンタチバナの果實)] すなわちエゾゴゼンタチバナの果實に對する。

菅原繁蔵「樺太の植物」(p. 249) にわ『ニボコ』とあり、千徳太郎治「樺太アイヌ叢話」(p. 23) に『ニイボコントレヘ』なるものを挙げ、エチイチャラ(イワツツジの果實)に似て小なりとしている。ニドレヘ *ni-turex* わ木の實をさしてゆう語であるから、本條のものとは違ふであらう。

§ 101. エゾゴゼンタチバナ

Chamaepericlymenum sueticum Aschers. et Graebn.

kaxkax (kák-kax) 「カハカハ」 果實 《白浦, 真岡》

注 1. ——千徳太郎治「樺太アイヌ叢話」(p. 23) に,
 カハカハ——草の實(色紅, 食すればかりかりと云ふ)
 とある。

注 2. ——菅原繁蔵「樺太の植物」(p. 249) に、『カッカ』『ヤヤンカッカ』と出ている。正しい形わ *kák-kax*, *yayán-kaxkax* である。*yayán* わ「普通の」の義。*si-kaxkax* [本當の・ゴゼンタチバナの實] に對する。前條參照。

§ 102. ミズキ *Cornus controversa* Hemsl.

- (1) **utukanni** (u-tú-kan-ni) 「ウト・カンニ」 莖 《北海道各地》
 (2) **utukani** (u-tú-ka-ni) 「ウト・カニ」 莖 《長萬部, 幌別, 穂別》
 注 1. —幌別でわ **utukani**, **utukanni**, いずれも通る。
 (3) **inawnani** (i-náw-na-ni) 「イナウナニ」 [inaw (木幣) na (切る) ni (木)]
 莖 《禮文華》
 (4) **inawnini** (i-náw-ni-ni) 「イナウニニ」 [inawni (木幣の木) ni (木)] 莖
 《長萬部》

注 2. —「木幣の材をとる木」の義。長萬部でわミズキを **utukani** とし **inaw-ni** としともゆう。

注 3. —北見國紋別郡にイナウ・ウシ・ベツ 「木幣樹・多くある・川」 なる地名あり、永田翁の註に “「イナウニ」又「ウト・カンニ」ト云フ” とある (C, p. 446)。彼地でわ「イナウニ」というだけでミズキを意味したらしい。

(参考) この木わ、木幣の材として、キワダに次いで重要な木である。天國でわ、キワダわ金で、ミズキわ銀で、ハシノキわ銅だと云われ、ミズキで作った幣わ天國え行くと銀の幣になると考えられている。

幣わ普通オナギで作るが、神に特に敬意を表する場合にわミズキで作る。

例えば、鮭を獲った場合、その頭を叩いて殺す打頭棒——「イさバキッニ」[i (その) sapa (頭) kik (叩く) ni (木)] (幌別), 「イさキッニ」[i (その) pa (頭) kik (叩く) ni (木)] (美幌), 「イさバタニ」[i (その) sapa (頭) ta (打つ) ni (木)] (白浦), —これわ直径 3cm., 長さ 45cm. 位の棒で、川漁に歩く際わ必ずこれを携行し、鮭を獲ったら一本一本これで頭を叩いて殺すのであるが、その際

イナウ・コル inaw kor (木幣を持て)!

イナウ・コル inaw kor (木幣を持て)!

と唱えながら叩く。これによって、打頭棒わ神え捧げるイナウと考えられていることが分る。鮭わこのイナウを土産にもらって初めて天國え大手を振って歸ることができるのである。だから有合わせの石塊や木片で頭を叩けば魚の神が怒っても二度と魚を興えぬと信じて、この打頭棒わ特に大切に扱われ、漁期ごとに新しいのを作って用い、用がすめば戶外の幣場に置いて「イわッテ」iwakte [歸らせる, その簍を本國に歸らせる] するのである。

この打頭棒を普通わヤナギで作るが、古い人わ特にミズキで作る。ミズキで作れば銀の幣を捧げることになり神に喜ばれるからである。尙、打頭棒に就いてわ § 206, 注 3, 参照。

§ 103. エゾノヨロイグサ *Angelica anomala Lallem.*

辭書に *Setashiu-kina* とあり、「樺太の植物」に『セタシューキナ』とある。正しい形わ「セタシウキナ」*Setá-siwkina* [seta (犬) siwkina (エゾニユウの葉柄)] である。

§ 104. アマニユウ *Angelica edulis Miyabe*

- (1) **chisuye** (chi-sú-ye) 「チスイエ」 葉柄 《長萬部, 有珠, 室蘭, 幌別, 白老, 襟似, 名寄》

- (2) **chihuye** (chi-hú-ye) 「チフイエ」 葉柄 《鵝川, 沙流, 穂別, 千歳》

(参考) 皮を剥いて、子供らわそのまま、大人わ油をつけて食った。また、蕨を煮る時の様に、鍋の口の大きさに切り揃えて束ねて煮て——束ねるのわ鍋の中で **kirú** (引っくり返す) のに都合の好いようにするためである、——煮えたら **nimá** (木鉢) に上げておいて冷めたら皮を剥いて食った。また、皮を剥いて二三日乾してから **upúsi** (束) を作って軒下の始終風の當る所に吊しておいて冬期の用に備え、使う時わ水に浸けておいて戻して刻んで **ratáskep** (野菜料理) などに入れた (幌別)。

夏、魚油が腐りかけた時、この莖を刻んで入れて煮直した (同上)。

生の葉柄を真中から裂けば、中心が必ずうねうねしている。これを「バラカンカン」**parakankan** (サナダムシ) だと云って、食べる時わそれを取りのぞいて食べた (同上)。

§ 105. エゾニユウ *Angelica ursina Benth. et Hook.*

- (1) **siw-kina** (siw-ki-na) 「まウキナ」 [siw (にがい) kina (草)] 葉柄 《北海道, 樺太》

- (2) **poro-kutu** (po-ró-ku-tu) 「ポルクド」 [poro (大きい) kutu (筒状莖)] 莖 《白浦》 《A 十勝》

(参考) これを取って来たら、先ず皮を剥いて味を見て、比較的がくさいのを選んで生で食べた。魚油を附けて食うと苦くないとも云っていた。苦いのわ水にひたしておいて汁の實にして食べた。皮をむく時、根もとの方の切り口え小刀で十文字に切れ目を入れ、それを自分の口の近くえ持って来て「ふッサ！」 hússa! と云って呼吸を吹きかけ、それから、

e-siw ko anakne お前もし苦かったら

asinru orun 便所の中え

e-omare-as 突っこんで

kusu ne na! やるぞよ!

とか、或いわ、

e-siw ko anakne お前もし苦かったら

e-otompuye お前の尻の穴

ku-poypoye ほじくって

kusu ne na! やるぞよ!

とかゆう文句を唱えて、それから、

siw kina ながくさ

tóopen あまくなあれ

kiná くさ

tóopen あまくなあれ

と唄いながら皮をむく。そうすれば決して苦くないと信じていた(幌別、白老)。この草わ、生える土地によって苦味の強いのとそうでないのとあり、幌別でわ川の西にあるのわ苦味が少いとされていた。

樺太の白浦でわ、この花の咲く頃までに鱒がとれなければ、その年わ不漁とされていた。

§ 106. エゾオオバセンキュウ *Angelica reflecta* Fr. Schm.

(1) yakar-kina (yá-kar-ki-na) 「ヤカルキナ」 莖葉 《有珠、幌別》《A 上川》

(2) mo-siwkina (mo-siw-ki-na) 「モシウキナ」 [mo (子、小) siwkina (エゾニエウの葉柄)] 莖葉 《A 沙流・鵲川・千歳・上川》

(3) pawchi-kina (páw-chi-ki-na) 「ばウチキナ」 [paw-chi (魔女) kina (草)]

莖葉 《A 石狩》《長萬部、襟似》

(4) munusi (mú-nu-si) 「むヌシ」 [<mun (草) ousi (根)] 根 《名寄》

(参考) 腹痛の時根を嚙んで水で飲みく dashita. ふだんでも煎じてお茶に飲んだ(幌別、名寄)。

§ 107. コジャク *Anthriscus nemorosa* Spreng.

(1) i-chari-kina (i-chá-ri-ki-na) 「イチャリキナ」 [あれを・散らす・草] 莖葉 《北海道各地》

注 1. —この植物の比較的若い葉を多量に採集して蔭ぼしにして保存しておき、月経 (menóko-siyeye 女の・病氣) の時とかその他の時に散らし紙と同じ用途に用いた(美幌)。名稱の語原わそこから来ているらしい。

(2) icharipo (i-chá-ri-po) 「イチャリポ」 [<i-chari-p (あれを・ちらす・もの) -po (指小辭)] 莖葉 《天鹽》

(3) icharapo 「イチャラポ」 [<icharipo] 莖葉 《樺太》

注 2. —北海道南部方言と樺太方言の間にわ i>a の類例が多い。

matámpusi > atámpusa 綿帽子

múkkuri > múxkuna 口琵琶

sínki > sinka 疲れる

tomári > tomára 碇泊地(鵜城)

icháripo > ichárapo コジャク

(参考) 花の咲かないうちに真中の莖(45 cm 位)を取って皮をむいて生で食べ、また焼いて油をつけて食べた(白浦)。莖を漬物にした(幌別)。

§ 108. ホタルサイコ *Bupleurum sachalinense* Fr. Schm.

opokay-kina (o-pó-kay-ki-na) 「オボカイキナ」 [opokay (ジャコオジカ) kina (草)] 莖葉 《白浦、真岡》

§ 109. ドクゼリ *Cicuta virosa* L.

- (1) **tokaomap** (tó-ka-o-map) 「とカオマフ」 [to(沼) ka(の上) oma(にある) p(もの)] 根茎 《北海道各地》
- (2) **tokomax** (tó-ko-max) 「とコマハ」 [<to-ka-oma-p] 根茎 《樺太各地》
- (3) **tokoma-toma** (tó-ko-ma-to-ma) 「とコマトマ」 [to(沼) ka(の上) oma(にある) toma(塊根)] 根茎 《白浦》
- (参考) 悪疫流行の際、この根茎を刻んで袋に入れ、子供のお守りにした。體に熱ある時、それを刻んで布きれに包み、それで體を拭った(白浦)。腰が痛む時、それを焼いて患部に當てた(幌別)。矢毒にも使った(→p. 145)

§ 110. エゾノシシウド エゾノハマウド

Coelopleurum Gmelini Ledeb.

chikapa-siwkina (chi-ká-pa-siw-ki-na) 「チカパシウキナ」 [エゾニュウもどきの義] 葉柄 《白濱》

注 1. —植物誌 (E, p. 200) に『チカップシユキナ』とあり、辭書に *chikap-shiukina* とある。<chikáp(鳥)-siwkina(エゾニュウの葉柄)。

注 2. —植物誌 (E, p. 200) に『フーラッキナ』(樺太アイヌ名) とあり、辭書に *Hurak-kina* とある。<húra(臭)-at(する)-kina(草)。

(参考) この花わ、それが咲きだす頃までに鱒がとれなければ、その年の鱒漁は見込がないとされていた(白浦)。

飼熊が病氣の時、この草をとって来て與えた(同上)。

§ 111. カラフトニンジン *Conioselinum kamtschaticum Rupr.*

(1) **hurawen-chipoko** (hú-ra-wen-chi-po-ko) 「ふラウェンチポコ」 [hura(臭) wen(悪い) chipoko(マルバトオキの莖葉)] 莖葉 《白浦》

(2) **umew-kina** (u-méw-ki-na) 「ウメウキナ」 莖葉 《真岡、鶴城》

注 1. —北海道でイブキボオフウの根を「ウベウ」*upéw* とゆうが、「ウメウ」わそれと関係があるだろう。また千島の「ウペイ」(*upeí*「有要食物の一種」——鳥居龍藏「千島アイヌ」p. 166)とも関係があるだろう。

(参考) この莖葉とイソツツジの莖葉とをませて煎じ、風邪或いは産前産後に服用

した。打身の時もその煎汁で患部を洗った(白浦)。

§ 112. ミツバ *Cryptotaenia japonica Hassk.*

michipa (mi-chí-pa) 「ミチバ」 [<日本語“ミツバ”] 莖葉 《幌別》

(参考) 幼苗を食用に供した。

§ 113. ハナウド *Heracleum lanatum Michx.*

(1) **pittok** (pit-tok) 「ビットク」[→注 1] 根生葉の葉柄 《全北海道》

注 1. —pittok わ, *pir*(きず)-*tuk*(癒合する), か。

注 2. —辭書に *Pittok-kina* とあるが、普通どこでも *pittok* とだけ云って *kina* とわ云わぬ。

(2) **har** 「はル」 莖 《全北海道》

注 3. —第三人稱形わ *hári*, *hárihi* である。

(3) **hara** (ha-rá) 「ハラ」 莖 《樺太各地》

注 4. —第三人稱形わ *hári*, *hárihi* 或いわ (*hárihe*) である。北海道とアクトのちがうことに注意。

注 5. —金田一博士の探訪隨筆 (p. 138) に、花ウド (*pittok*, 樺太 *hara*, 方言サク), とある。しかし、*pittok* わハナウドの總名でわなく、根生葉の葉柄をさす名稱である。また、*hara* わ、もとの形が *har* で、それわ北海道のものと同じであり、かつ、これもハナウドの總名でわなく、中心に出る中空圓柱形の莖をさす名稱である。ハナウドでわこの莖よりむしろ根生葉の葉柄の方が重要で、それにわ以下に示すごとく多くの名稱があるのである。

注 6. —*hara* のことを、真岡でわ別に *kina-chihe* “草・の陰莖”ともゆう。

(4) **situru-kina** (si-tú-ru-ki-na) 「シとルキナ」 [*situru* (<*si-turu* “自分を・伸ばす” “伸びる”) *kina*(草)] 根生葉の葉柄 《樺太各地》

注 7. —根生葉わ長大な葉柄を持つので“伸び出た草”と云ったのである。

注 8. —概報 (G, p. 39) に、ハナウドの名として *Hara* と並べて *Shiturukina* とある。*Hara* わ莖で *Shiturukina* わ葉柄なのを混同しているのである。

(5) **chituru-kina** (chi-tú-ru-ki-na) 「チとルキナ」 [<*situru-kina*] 根生葉の葉

柄 《樺太各地》

注 9.——再歸相の si- わ中動相 (*middle voice*) の chi- と交替し得る。

- (6) **chikisa-kina** (chi-ki-sa-ki-na) 「チキサキナ」 [chi (我ら) kisa (皮をむく) kina (草)] 根生葉の葉柄 《白浦》

注 10.——眞岡でわ、皮を剥いてそのまま乾した葉柄をゆう。

- (7) **chipere-kina** (chi-pé-re-ki-na) 「チペレキナ」 [chi (我らが) pere (裂く) kina (草)] 同上 《白浦》

注 11.——これも眞岡でわ、皮をむいて裂いて乾した葉柄をゆう。乾瓢の様なもの。だから、この地方でわ、瘦せて骨ばかりになった者を形容して “chipere-kina nenan” 「ハナウドの乾瓢の様だ」とゆう。

- (8) **chiinun-kina** (chi-i-nun-ki-na) 「チイヌンキナ」 [chi (我らが) i (それを) nun (しゃぶる) kina (草)] 葉柄 《大泊、落帆》

注 12.——これで kina-pise とゆうものを作って母乳代りに赤児にしゃぶらせるのでこうゆう名がついている。後説。

注 13.——白濱でわ、採集して貯えておく野草の總名だとゆう。 chi-e-inun-kina “我ら・それを・貯える・草” の義に解しているのである。

(参考) 幌別でわ、この植物の若い莖を取って皮をむいて生で食い、葉柄わ皮をむいて乾しておき、冬の食料にした。根わ、洗って刻んで粥に入れたり、冬わ乾し貯えてあったものを刻んで茶にして飲んだ。その「煎汁」(概念形「うセイ」úsey; 第三人稱形「うセイエ」「うセイェヘ」úseye, úseyehe) わ腹痛の薬にもしたし、また「がっちゃき」(「おイタ」óyta) とゆう病氣にわそれで坐浴させ、さらにその根を噛んで患者の背すじからお尻の所までなすりつけて行き、また頭の頂にも充分なすりつけて、それから

hussa!

と強く呼氣を吹きかける民間療法があった。

美幌でも、この根を噛んで柔かくして、「がっちゃき」(「ムプイェウエン」sipuyewen), あるいわ赤児の尻の荒れた際、肛門に入れて坐薬にした。

樺太の白浦でも、眞中に出る莖(概念形 hará, kina-chi; 第三人稱形 hari, harihe, kinachihe) の軟かな所を擇んで皮をむいて生で食い、横に出てくる葉柄わ、小刀で

皮をむいて乾したくわえておき、冬になってから「シと^ルキナ・チカリベ」sitúrukina-chikaripe [ハナウド料理] と稱する特別料理に使った。

ハナウド料理の作り方わ、皮をむいて乾しておいた葉柄を生温い湯の中に漬けておいて柔かくする。それから細かく裂いて刻み、鍋に入れて煮て、それを手で絞っておく。別に、數の子を水に漬けて柔かくし、それを小刀で細かく刻んで、木鉢の中に入れ、海豹の油を杓子で少量くみ入れて、まっ白くなるまで搗粉木で搗きつぶす。さらに、それえ「チエトイ」[chi (我ら) e (食う) toy (土), 食用粘土] を少量水にといて入れる。そして、さきに手で絞っておいた葉柄の刻んだのをこの中え入れて、かきまぜて食った。この汁わ、母乳代りに幼児にも飲ませた。その飲ませ方わ、ハナウドの花莖の適当な太さのものを擇び、15~18 cm. 位に切って水につけておき、柔かくなったら一方の端を糸でくくって、他方の端から吹いてふくらませ、その中にこの汁を入れて端を結び、何本でも作って上から吊しておく。それを「キナピセ」kiná-pise (草の油袋) と稱する。それを赤坊に與える際わ、一方に小孔をうがってそこから吸わせるのである。

§ 114. マルバトオキ *Ligusticum scoticum* L.

chipoko (chi-pó-ko) 「チボコ」 莖葉 《樺太各地》

(参考) この植物わ、その若い莖を生食した。それを刻んで飯にたきこんだり、刻んだのを乾したくわえて冬の食糧にしたりした。これを主材とせる料理を chipoko-chikaripe とゆう。その煎汁わ産婦にいいとされていた。その煎汁を chipoko-ohaw とゆう(新聞)。

§ 115. カワラボオフウ *Peucedanum terebinthaceum* Fisch.

kimun-upew (ki mú-nu-pew) 「キムヌペウ」 [山の・ウペウ] 根 《沙流》

注——ウペウわ普通イブキボオフウの根をゆう。→§ 118 参照。

§ 116. ハマボオフウ *Phellopterus littoralis* Benth.

幌別でわ、日本語をとり入れて、

「ぼフ」pohu (pó-hu) 莖葉

と云っている。「蝦夷拾遺」にわ、『オタシウキナ』と出ている。

ota-siwkina (o-tá-siw-ki-na) 「オタシウキナ」 [ota (砂漠) siwkina (エゾニユウ)]

莖葉

の義である。

§ 117. オオカサモチ オニカサモチ

Pleurospermum kamtschaticum Hoffm.

(1) tunikaomap (tú-ni-ka-o-map) 「とニカオマッ」 莖 《幌別》

注 1. —túni (カシワギ) -ka (の上) -oma (にある) -p (もの) の様に一應
わ取れるけれども、それでわ意味が通らない。tun (二人) u-ka-oma (重つ
た) p (もの) で、その莖の高く伸びるのに名づけたのもあろうか。

(2) ekasakorkutu (e-ká-sa-kór-ku-tú) 「エカサコルクト」 [e (頭) kasa (笠)

kor (もつ) kutu (筒莖)] 莖 《美幌, 屈斜路》

(3) oromakutu 『オロマクツ』 (B)

注 2. —但し、これわハンゴンソオのまちがいであらうか。→§ 29 参照。

§ 118. イブキボオフウ

Seseli Libanotis Koch, var. daucifolia Franch. et Sav.

(1) upew (u-péw) 「ウヘウ」 根 《北海道各地》

(2) umew (u-méw) 「ウメウ」 根 《美幌》

注 1. —カワラボオフウを kimún-upew (山のウペウ) と云う所がある。千島
で、有要食物の一に upey (upei) とゆうものがある(鳥居龍藏, 千島アイヌ, p.
166)。それなども関係があろう。

注 2. —カラフトニンジンを uméw-kina (ウメウ草) と云う所がある。その
ウメウもやはり関係があるだろう。→§ 111 参照。

(参考) 辭書に次の如き説明がある。「繖形科の草本の一で強い薬臭を有する。薬
劑として盛んに用いられ、凡ゆる病氣に効くと云われている。……流行病の際にこの
upeu わ盛んに探し求められるが、それわこのものが病氣に對する一大豫防薬である
と考えられ、また一種の護符に役立つと云われているからである。私わ彼等がそれを

噛んでいるのを何度も見たし、また病氣を近づけぬために小屋の中にそれを吊してい
るのも見た。天然痘がひどく流行している際であったが、一匹の犬の首輪にそれを幾
つか結びつけて小屋の周囲を追い廻しているのも見た。この植物を隨時お茶や水の代
りに飲用され、しかも愛用されることが多い。普通にわこの草を熱湯に浸して煎汁を
作る。風邪の際もそうして服用する。老人の中にわ煙草の味をよくするためにこの根
を少々混ぜるものもある」。

この記述にもある通り、この植物の根わ、廣く薬用に供され、特に風邪・腹痛・宿
醉等の特效薬と考えられている。風邪の際に煎じて飲む他に、粥の中に入れて食べ
た。痘瘡の際も勿論用いたが、すべてその強烈な臭氣が病魔を撃退するとう信仰に
基いているのである。

§ 119. ヤブジラミ Torilis Anthriscus Gmel.

(1) seta (se-tá) 「セタ」 [犬] 果實 《幌別》

(2) sitatayki (si-tá-tay-ki) 「シタタイキ」 [sitá (犬) táyki (蚤)] 果實 《美幌》

(3) sitatayki-mun (si-tá-tay-ki-mun) 「シタタイキムン」 [上記果實のなる木の
義] 莖葉 《美幌》

§ 120. ケヤマウコギ Acanthopanax divaricatum Seem.

(1) enenke-ni (e-nén-ke-ni) 「エネンケニ」 [en-en-ke (とげ・とげ・した) ni
(木)] 莖 《C, 勇拂郡》

(2) eninke-ni (e-nin-ke-ni) 「エニンケニ」 [上記の轉訛] 莖 《A 石狩》

(3) horkaayusni (hór-ka-a-yus-ni) 「ホルカアユシニ」 [horka (きかきに) ay
(とげ) us (生えている) ni (木)] 莖 《類似》 《A 沙流・千歳・上川》

(4) horkawosni (hór-ka-wos-ni) 「ホルカウオシニ」 [上記の轉訛] 莖 《茨伏》

(5) nitat-sikerpe (ni-tát-si-ker-pe) 「ニタシケルペ」 [nitat (濕地) sikerpe
(キワダの實)] 果實 《美幌》

(6) nitatsikerpe-ni (ni-tát-si-ker-pe-ni) 「ニタシケルペニ」 [上記の果實のな
る木の義] 莖 《美幌》

(7) sita-sikerpe (si-tá-si-ker-pe) 「シタシケルペ」 [sita (犬) sikerpe (キワダ

の實〕果實 《足寄》

(8) **sitasikerpe-ni** (si-tá-si-ker-pe-ni) 「シタシケルペニ」 [上記果實のなる木]

莖 《足寄》

(参考) 瘰癧にわ、この莖及び果實を煎じて飲む(足寄)。

§ 121. コシアブラ

Acanthopanax sciadophylloides Franch. et Sav.

(1) **kotorusni** (ko-tó-rus-ni) 「コとルシニ」 [kotor (斜面) us (に多くある) ni

(木)] 莖をゆう 《幌別》

(2) **koturusinni** (ko-tú-ru-sin-ni) 「コと°ルシンニ」 莖をゆう 《沙流、鷺川、

穂別、千歳、様似、近文》

(3) **pirakka-ni** (pi-rák-ka-ni) 「ピラッカニ」 [pirakka (下駄) ni (木)] 莖をゆう

《幌別》

(参考) 杓子やへらなどを作ったほか、アイヌの下駄わ必ずこれで作る習いだった(幌別)。

§ 122. ウド *Aralia cordata Thunb.*

(1) **chima-kina** (chi-má-ki-na) 「チマキナ」 [chima (かきぶた) kina (草)] 莖

葉を云う 《北海道全域》

(2) **opaxtara** (o-páx ta-ra) 「オパハタラ」 莖葉をゆう 《真岡》

(3) **poypo** (póx-po) 「ポポ」 枯莖 《白主》

(4) **sewax** (se-wáx) 「セワハ」 若芽 《白主、白浦》

(5) **sewax-kina** (se-wáx-ki-na) 「セワハキナ」 莖葉 《白主、白浦》

(6) **sewax-chinkewhe** (se-wáx-chin-kew-he) 「セワハチンケウヘ」 根 《白主、白浦》

(参考) 幌別でわ、この若い莖を取って来てそのままで或いは鰯といっしょに煮て皮をむいて食べた。また、この莖を煎じて、その煎汁で傷口を洗うと化膿を防ぎ、腫物を洗うとかきぶたがつかぬとゆう。足寄でも、この莖を輪切りにして傷口に貼りつけると化膿しないとゆう。クマに傷つけられた時に、この生の根を輪ぎりにして傷口

に當て、また根の煎汁を以て傷口を洗えば効があるともゆう(樺太植物調査概報, p. 52)。「チマ・キナ」(かきぶた・ぐさ) とゆう名稱わ、そこから起っている。なお、樺太の白浦でわ、神経痛や關節炎や打身などに、この根を煎じて患部を洗ったとゆう。

§ 123. タラノキ *Aralia elata Seem.*

(1) **ayus-ni** (á-yus-ni) 「アユシニ」 [ay (とげ) us (多くある) ni (木)] 莖をゆう 《幌別》

(2) **ayus-ni** (a-yús-ni) 「アユシニ」 [とげ・多くある・木] 莖を云う 《荻伏》

(3) **aus-ni** (a-ús-ni) 「アウシニ」 [＜ay-us-ni とげ・多くある・木] 莖 《荻伏、様似》

(4) **siayusni** (sí-a-yus-ni) 「シアユシニ」 [si (本當の) ayusni とげ多く生えている木] 莖 《穂別》

(5) **aykoroni** (áy-ko-ro-ni) 「アイコロニ」 [ay (とげ) koro (もつ) ni (木)] 莖 《真岡》

(6) **chitchakkereni** (chít-chak-ke-re-ni) 「ちっちゃッケレニ」 [chit (腔に) sapkere (味を見させる) ni (木)] 莖 《美幌》

注 1. — 屈斜路でもさうゆう名稱があつたらしく、更科源藏氏によれば「別にチャッチャッケレニといふ名もあるが、そんな事があつたのかなかったのかわからないが、ちよつとこゝで日本語に譯し兼ねる」とある(コタン生物記, p. 20)。

(7) **enenkeni** (e-nén-ke-ni) 「エネンケニ」 [enen-ke (とげ・とげ・している) ni (木)] 莖をゆう 《長萬部、穂別、平取》

(8) **horkaayusni** (hór-ka-a-yus-ni) 「ホルカアユシニ」 [horka (逆に) ay (とげ) us (多く生えている) ni (木)] 莖をゆう 《美幌、屈斜路》

(9) **sewatni** (se-wát-ni) 「セワツニ」 [sewat (ウドの新芽) ni (木)] 莖をゆう 《近文、名寄》

注 2. — この木の若い芽わウドのそれに似ているのでこの名がある。

(10) **sewas-ni** (se-wás-ni) 「セワシニ」 [同上] 莖をゆう 《美幌》

- (11) **sewaxni** (se-wáx-ni) 「セワハニ」 [＜sewat-ni] 莖をゆう 《眞岡》
 (12) **suwatni** (su-wát-ni) 「スワッニ」 [suwat (爐かぎ) ni (木)] 莖をゆう
 《A 十勝》

注 3. —この木を爐かぎの材に用いたので民間語原説によってこうゆう形が生じたのであろう。

(参考) この木の若芽を取って食べた。胃痛の時にわ、根を取って煎じて飲んだ。
 この木の莖面にわ、鋭い刺が密生しているので病魔が恐れて近ずかぬと信じ、悪疫流行の際わ、この木の枝を戸口や窓口や分れ路や水汲路の所などに立てておく(美幌、名寄)。この木わまっすぐで節がなく、おまけに軽いのでよく物ほし竿に使った(幌別)。

§ 124. エゾウコギ *Eleutherococcus senticosus Maxim.*

nitat-sokoni (ni-tát-so-ko-ni) 「ニタッソコニ」 [nitat (濕地) sokoni (→§ 48)]

莖をゆう 《美幌》

(参考) 悪疫流行の際この木で杖を作って持って歩く(美幌)。

§ 125. ハリギリ センノキ *Kalopanax ricinifolius Miq.*

- (1) **ayusni** (a-yús-ni) 「アユシニ」 [ay (とげ) us (多くある) ni (木)] 莖をゆう
 《長萬部、禮文華、穂別、釧路、美幌、名寄、眞岡》

- (2) **aysini** (áy-si-ni) 「アイシニ」 [＜ay-us-ni] 莖をゆう 《名寄》

(参考) この木の材で丸木舟、木鉢(天鹽 *nimá*、屈斜路 *ní-ita*)、臼、杵、箕の類を作った(各地)。

§ 126. ヤナギラン *Epilobium angustifolium L.*

- (1) **kinapoax** (ki-ná-po-ax) 「キナポアハ」 皮 《白浦》

- (2) **kinapoax-ni** (ki-ná-po-ax) 「キナポアハニ」 莖 《白浦》

(参考) 莖葉を乾したくわえておき、胃腸病に煎じて飲んだ。また、子宮病や滑湯にも同様に煎じて飲み、或いわその煎汁で局部を洗滌した(G 樺太)。語原わ *kina* (草)、*poax* (子宮)。

§ 127. ヒシ *Trapa natans L. var. bispinosa Makino*

- (1) **pekampe** (pe-kám-pe) 「ペカッペ」 [pe (水) ka (の上) un (にある) pe (もの)] 果實 《北海道各地》

- (2) **kisara-tarara-pekampe** (ki-sá-ra-ta-ra-ra-pe-kam-pe) 「キサラ・タララ・ペカンペ」 [kisara (その耳を) tarara (立てている) pekampe (ヒシの實)] 果實 《A 千歳》

- (3) **ni-tarara-pekampe** (ni-ta-ra-ra-pe-kam-pe) 「にィ・タララ・ペカンペ」 [ni (その齒) tarara (むいている) pekampe (菱)] 果實 《A 空知》

(参考) 果實わ茹でて乾燥し、或いわ初め天日で生乾にしてから爐の上の棚の上で乾燥し、貯藏しておいて、食べる時にわ小刀或いわ齒を使って皮をむいて(そうすることを美幌でわ *pekampe-na-an* [われら菱の實をむく] とゆう)、菱の實の粥を作る(それを美幌でわ *pekámpe-tettep*、幌別でわ *pekampe-sayo* とゆう“菱の實・がゆ”の義)。その粥の中に、ギョオジャニンニクの乾した葉を刻んだものやオオウバユリの根を搗いて乾し堅めたものを碎いて入れて炊いて食べたり、或いわ菱の實を茹でたのをそのまま皮をむいて食べたりした(幌別)。

釧路の塘路のコタンでわ、菱の實が稔る頃になると、「ペカンペ祭」とゆうものを盛大に行い、それがすんで始めて湖上に三々五々舟を浮べて菱の實をとりにかかる。菱の實をとるにわ古く歌を歌いながら採ったものであるらしく、今の祭の際に歌われるウボボと稱する踊り歌の中にわ、その時の労働歌だったと思われるものが含まれて残っている。美幌でわそれを「イウク・ウボボ」 *i-úk-upopo* [i (物) uk (採る) upopo (歌)] と云っている。次の様なものがある：—

ねタワタ *né-ta-wa-ta*

かさサ *ká-sa-sa*

トオチベク *to-ó-chi-pek*

ねタワタ *né-ta-wa-ta*

ちベカ *chi-pe-ka*

トオカサシ *to-ó-ka-sas*

これわ次の様な意味にとれる。

ne-ta wa-ta	どこに一體
kas as a?	小屋があつたのだろ?
too chip ek!	あそこに舟が来る!
neta wata	どこから一體
chip ek a?	舟が来たのだろ?
too kas as!	あそこに小屋がある!

次の様なものもある。

げタはタあ	gé-ta-há-ta-á
げタふれえ	gé-ta-hú-re-é

geta わ ketcha 「果柄」か。とすれば getaha わ ketchaha 「その果柄」である。

第一句わ

ketchaha tá a?	その果柄取ってみたか?
----------------	-------------

とゆうことになる。第二句わ

ketcha húree!	果柄わ赤いよ!
---------------	---------

であろう。菱の實の果柄が赤く色づいていて取られるのを待つばかり、とゆう意味にとれる。

従来、ウゴボを「神頌歌」と譯し、それに就いて「歌詞の内容は單純で神々を讚美するものが多いから先ずアイヌの讚美歌といつてもよい」などと説いている人もあるけれども、それが當を得ていないことわ、事實が雄辯に物語っている。ウゴボの中にわ、神を讚美するものなど、よしあつたとしても極めて少い。舟こぎ唄、粉つき唄、草刈り唄、踊り唄、等、廣い意味での労働歌が大部分を占めているのである。尙、草刈唄に就いてわ § 397 参照。

§ 128. オニビシ *Trapa natans* L. var. *quadrispinosa* Makino

ine-aw-us-pekampe (i-ne-aw-us-pe-kam-pe) 「いネアウシ・ペカンペ」 [ine (四つの) aw (舌) us (ついている) pekampe (菱の實)] 果實 《A 千歳・石狩川下流》

§ 129. ヒメビシ *Trapa bispinosa* Boxb. var. *incisa* Wall.

- (1) pon-pekampe (pén-pe-kam-pe) 「ぼン・ペカンペ」 [小さい・菱の實] 果實 《A 千歳》
- (2) sey-rarak-pekampe (séy-ra-rak-pe-kam-pe) 「セイララク・ペカンペ」 [殻・すべすべした・菱の實] 果實 《A 石狩川下流》

§ 130. エゾミソハギ *Lythrum Salicaria* L.

- (1) ento (én-to) 「エント」 莖葉 《北海道各地》

注 1. —「エント」わもと子實をさして云つたものらしい。下記 (2), (3) の名稱からそれが察しられる。

- (2) ento-num (én-to-num) 「エントヌム」 [エント・粒] 子實の粒 《同上》

注 2. —微小なものの譬に引かれる。古語の中にも出て来る:

oar sikihi	片方の眼わ
ento-num ne	ミソハギの種子の様に小さくて
chirawekatta	ぐつと落ちくぼみ
oar sikihi	片方の眼わ
sikari-chup ne	満月の様に大きくて
chisoyekatta	むき出しになっている
ar-kamiasi	恐しいばかりのもの

(金田一京助, アイヌ聖典, p. 150)

- (3) ento-mun (én-to-mun) 「エントムン」 [エントとゆう子實のなる草] 莖葉 《足寄》

(参考) 莖葉を打身の薬に使つた。すなわち、それを石で暖めて患部を包み布で巻いた(足寄)。

§ 131. アキグミ *Elaeagnus umbellata* Thunb

- (1) susmaw (sús-maw) 「すシマウ」 果實 《幌別》

注 1. —maw わ、今わもつぱらハマナスの果實をさすことになっているが、古くわハマナスばかりでなく、アキグミもイチゴもエンレエソオの果實もそれからホヅキも皆 maw だったらしいことわ、それらの植物の名義からも察し

られる。

注 2. —英雄詞曲の中で、禿頭の英雄をさして「ふレマウボ」 hure-maw-po

“赤い・マウ・さん”と呼んでいる例がある（虎杖丸の曲, p. 446）。

- (2) **susmaw-ni** (sús-maw-ni) 「すシマウニ」 [上記果實の生じる木の義] 《幌別》
 （参考）果實を生食した。また、果實の色に因んで、黄疸や血便の出る病氣（大腸カタル・赤痢等）に、枝を煎じて服用した。單獨でも用いるが、重症の際わ、次の三種を合わせて用いる。

susmaw-ni アキゲミの枝

emawrini 木苺の枝

ponrayta-mun ダイコンソオの莖葉

以上三種を等量にまぜて片手いっぱい握り、両端を切りすて、手中に残った 9 cm. 内外のものを、約 1 升の水が半量になるまで、煎じつめてその濃い煎汁を暇なしに飲ませるのである（幌別）。

§ 132. ナニワズ *Daphne yezoensis Maxim.*

ketuhas (ke-tú-has) 「ケと°ハシ」 [ketu (つっぱる) has (灌木)] 莖 《A 沙流、鵝川、千歳》

§ 133. カラスシキミ *Daphne Miyabeana Makino*

ketuhas (ke-tú-has) 「ケと°ハシ」 [ketu (つっぱる) has (枝條)] 莖 《A 沙流、鵝川、千歳》

§ 134. スミレ *Viola mandshurica W. Beck. var. ciliata Nakai*

(1) **kamakata-nonno** (ka-má-ka-ta-non-no) 「カマカタ・ノンノ」 [蝶・花] 花 《幌別》

(2) **marawre-kakko** (ma-ráw-re-kak-ko) 「マラウレ・カケコ」 [蝶・花] 花 《阿寒》

(3) **motot-kina** (mo-tót-ki-na) 「モとッキナ」 [脊骨・草] 莖葉 《B》

§ 135. オオバタチツボスミレ

Viola kamtschadolorum Beck. et Hult.

nitexkara-kina (ni-téx-ka-ra-ki-na) 「ニテッカラキナ」 莖葉 《樺太各地》

（参考）莖葉を束にして蔭干にしておき、子宮病や消渴に煎じて飲む（白浦）。果實を食う。また傷口にこの葉を貼る（真岡）。この莖葉の浸出液で産後の局所を洗う（白浦）。この液汁を腫物に附ける（鶴城）。

§ 136. サルナシ *Actinidia arguta Planch.*

(1) **kutchi** (kút-chi) 「くッチ」 漿果 《北海道各地》

(2) **kutchi-punkar** (kút-chi-pun-kar) 「くッチブンカル」 [上記漿果の生じる蔓] 莖 《同上》

（参考）北海道各地でこの果實を生食し、蔓で「ちんル」 chinru（かんじきの一種）を作った。美幌でわ、この漿果を容器に溜めてその汁を醗酵させ酒の様に飲んだ。名寄でわ、春先この蔓の幹に傷をつけて、そこから垂れ落ちる「にイ・ワッカ」 ni-wakka（樹・液）を取り、神経痛の薬に飲んだ。

§ 137. マタタビ *Actinidia polygama Miq.*

この植物の名わ、果實に負うている。アイヌわ、この植物についてわ、もっぱらその果實を利用したからである。

(1) **matatampu** (ma-tá-tam-pu) 「マタタンブ」 果實 《長万部、幌別、穂別》

注 1. —mata（冬）tampu（日本語「たふ」）、冬に木からぶら下っている「つと」の義か。

(2) **natatampu** (na-tá-tam-pu) 「ナタタンブ」 果實 《白老》

（参考）この果實わ、サルナシに比して不味いので、「鳥の」とか、「祖父の」とか、「悪魔の」とか、限定詞がつく。

(3) **chikap-kutchi** (chi-káp-kut-chi) 「チカナクッチ」 [chikap（鳥）kutchi（サルナシ）] 果實 《荻伏》

(4) **ekasi-kutchi** (e-ká-si-kut-chi) 「エカシクッチ」 [ekasi（祖父）kutchi（サ

ルナシ) 果實 《有珠》

- (5) **kamuy-kutchi** (ka-múy-kut-chi) 「カむイクッチ」 [kamuy (悪魔) kutchi (サルナシ)] 果實 《様似》

注 2. —この場合の kamuy わ「神」と譯してわ當らない。「うエンカムイ」
wén-kamuy (悪い・神), 「にッネカムイ」 nitne-kamuy (同), の義である。
莖をさす時わ, それに punkar をつけてゆう。

- (6) **matatampu-punkar** (ma-tá-tam-pu-pun-kar) 「マタダンブブンカル」 [マタ
タビの生る蔓] 莖 《幌別》
- (7) **natatampu-punkar** (na-tá-tam-pu-pun-kar) 「ナタダンブブンカル」 [同上]
莖 《白老》
- (8) **chikapkutchi-punkar** (chi-káp-kut-chi-pun-kar) 「チカクッチブンカル」
[同上] 莖 《萩伏》
- (9) **kamuykutchi-punkar** (ka-múy-kut-chi-pun-kar) 「カむイクッチブンカル」
[同上] 莖 《様似》
- (10) **ekasikutchi-punkar** (e-ká-si-kut-chi-pun-kar) 「エカシクッチブンカル」
[同上] 莖 《有珠》

§ 138. ミヤママタタビ *Actinidia Kolomikta Maxim.*

果實に就いて先ず名がついた。アイヌわ, この果實を生食したからである。ただ,
その果實わ, サルナシに比べて少々不味なので, 「鳥のサルナシ」と名づけた。

- (1) **chikap-kutchi** (chi-káp-kut-chi) 「チカクッチ」 [鳥の・サルナシ] 果實
《名寄》
- (2) **chiru-kutchi** (chi-rú-kut-chi) 「チるクッチ」 [原形わ恐らく chiri-kutchi 「鳥
のサルナシ」, 蔓に生じるからそれに聯想して chiru-kutchi と訛ったのであろう]
果實 《美幌, 足寄》
- (3) **siru-kutchi** (si-rú-kut-chi) 「シるクッチ」 [上記の chiru-kutchi から, さらに
それが漿果なので汁に聯想して shirú-kutchi となったものか] 果實 《D 屈
斜路》

注 1. —或いわ日本語の「しらくち」と関係あるか。

- (4) **uchiri-kutchi** (u-chí-ri-kut-chi) 「ウチリクッチ」 [もと chiri-kutchi で “鳥
の・サルナシ” の義] 果實 《網走》

- (5) **chirikex** (chi-rí-kex) 「チリケヘ」 [chiri (鳥) kex (<kax 果實)] 果實
《白浦》

注 2. —[čí-ri-keç] とも [čí-ri-keš] とも發音される。

- (6) **chirikex-ni** (chi-rí-kex-ni) 「チリケヘニ」 [同上果實のなる木] 莖 《白浦》

- (7) **chirikix** (chirikix) 「チリキヒ」 [<chirikex] 果實 《真岡》

注 3. —[čí-ri-kiç] とも [čí-ri-kis] とも發音される。

- (8) **chirikix-ni** (chi-rí-kix-ni) 「チリキヒニ」 [上記果實のなる木] 莖 《真岡》
(参考) 莖をゆうにわ, 北海道でわ punkar, 樺太でわ ni をつける。

- (9) **chirukutchi-punkar** (chi-rú-kut-chi-pun-kar) 「チるクッチブンカル」 [鳥
のサルナシのなる蔓] 莖 《美幌, 足寄》

- (10) **chirikis-ni** (chi-rí-kis-ni) 「チリキシニ」 [チリキシの實のなる木] 莖 《真
岡》

(参考) 樺太でわ, 果實を生食した他に, 莖を産前・産後・脚氣など, 體のむくみ
に煎じて飲んだ。

§ 139. シナノキ *Tilia japonica Simk.*

アイヌわ, この樹の内皮で縄をつくった。天鹽でわ, 山のアイヌがその縄を多量に
作って漬え物々交換に來たとゆう。また, この内皮をさらして纖維をとり, 狩や漁に
行く時の脚絆などに織った。そこで, この内皮, またわその纖維に先ず名がつく。

- (1) **nipes** (ni-pés) 「ニペシ」 [ni (木) pes (もぎとった裂皮)] 内皮, 又わそれ
から取った纖維 《長萬部, 虻田, 有珠, 室蘭, 幌別, 穂別, 千歳, 沙流, 名寄》
- 注 1. —pes わ, mes-ke (もげる) mes-u (もぐ) などの語根 mes や, per-ke
(割れる) per-e (割る) などの語根 per, pet-ke (裂ける) pet-u (裂く) など
の語根 pet などと関係があり, ni-pes わ「木からもぎ取った裂片」を意味し
たらしい。

- (2) **si-nipes** (si-ni-pes) 「シニペシ」 [本當の・ニペシ] 内皮, 又わそれから取
った纖維 《穂別》

注 2. — オオバボダイジュの繊維を「ヤイ・ニベシ」(ただの・ニベシ)とゆうのに対して、シナノキのそれを、

「ふ・ニベシ」(本當の・ニベシ)

とゆうのである。

注 3. — シナノキの内皮から取った繊維を灰汁で煮ると淡紅色を呈する。河野常吉氏の調査によれば沙流郡平取附近のアイヌわそれを『チポッペニベシ』と云ったとある(河野廣道, アイヌの織物染色法, p. 70)。「チポッテ・ニベシ」chi-popte-nipes(我ら・煮立てた・シナ皮の繊維)の誤である。

- (3) **kuperkep** (ku-pér-kep) 「ク^ルケ^ナ」[<ko-perkep, ko(共に)perke(裂ける)p(もの)] 内皮, 又わそれから取った繊維 《美幌, 屈斜路, 足寄》
- (4) **kukerkep** (ku-kér-kep) 「クケ^ルケ^ナ」[<ku-perke-p] 内皮, 又わそれから取った繊維 《荻伏, 様似》
- (5) **on-kukerkep** (ón-ku-ker-kep) 「オン・クケ^ルケ^ナ」[on(鮮度の落ちた, なれた)kukerkep(シナノキの繊維)] 水の中につけておいてべとべとにやわらかくなった繊維をゆう 《様似》

注 4. — 樹皮から繊維を取る時わ, 表皮を削り去って, 内皮を水につけておき, ねるねるを洗い去って乾燥して使うのである。

以上の様に, 内皮またわその繊維に先ず名が付き, 次いでその内皮またわ繊維の取れる木とゆう意味で莖の名が生じている。

- (6) **nipes-ni** (ni-pés-ni) 「ニ^ルシニ」[ニベシの取れる木] 莖 《長萬部, 虻田, 有珠, 室蘭, 幌別, 穂別, 千歳, 沙流, 名寄》
- (7) **kuperkep-ni** (ku-pér-kep-ni) 「ク^ルケ^ナニ」[クペ^ルケ^ナの取れる木] 莖 《美幌, 屈斜路, 足寄》
- (8) **kukerkep-ni** (ku-kér-kep-ni) 「クケ^ルケ^ナニ」[クケ^ルケ^ナの取れる木] 莖 《荻伏, 様似》《A 十勝》
- (9) **sinipes-ni** (si-ni-pes-ni) 「シニベシニ」[本當のニベシの取れる木] 莖 《穂別》

注 5. — オオバボダイジュを「ヤイニベシニ」(ただのニベシの取れる木)とゆうのに対する。

(参考) 沖え出ると「ふリカッ」sirkap メカジキがああ「はい」hay(上顎が延びて劍のようになったもの)を碇舟の底に突き通すことがある。それで, 沖え乗り出す時わ, それを切断するため山刀を砥いで持って行くことを忘れない。また, メカジキの劍を突き刺されても割れない様に, 舟底わ必ずシナノキで作った(長萬部)。

§ 140. オオバボダイジュ *Tilia Maximowicziana Shirasawa*

- (1) **yay-nipes** (yáy-ni-pes) 「ヤイニベシ」[ただの・ニベシ] 内皮, またわそれから取った繊維 《長萬部, 穂別》

注 1. — 前條 (§ 139) 参照。

- (2) **yaaynipes-ni** (yáy-ni-pes-ni) 「ヤイニベシニ」[ただのニベシの取れる木] 莖 《長萬部, 穂別》

(参考) シナノキの場合と同じく, この木の皮からも繊維を取って, 縄などに利用したらしい。但し, それがシナノキの繊維よりも価値が劣るので, 「ただの」という限定詞が附いたのであろう。

§ 141. ヤマブドウ *Vitis Coignetiae Pulliat.*

- (1) **hat** 「はッ」 果實 《北海道全地》

注 1. — hat わ全北海道に通じる。ヤマブドウを nikaop, nikop と呼ぶ地方, 例えば美幌・屈斜路・足寄などでも, hat わ雅語として, 老人にわ記憶されている。

- (2) **hat-punkar** (hát-pun-kar) 「はッ^ンカル」[ブド^オ・ずる] 莖 《同上》
- (3) **hax** 「はハ」[<hat] 果實 《真岡》
- (4) **hax-punkara** (háy-pun-ka-ra) 「はハ^ンカラ」[<hat-punkar] 莖 《同上》
- (5) **nikaop** (ní-ka-op) 「にカオ^ッ」[ni(木)ka(の上)o(に生じる)p(もの)] 果實 《美幌, 屈斜路・足寄》

注 2. — nikaop わもと「木の實」の義。他地方でわ一般の木の實をさす。

- (6) **nikaop-punkar** (ní-ka-op-pun-kar) 「にカオ^ッ^ンカル」[ブド^オ・ずる] 莖 《同上》
- (7) **nikop** (ní-kop) 「にコ^ッ」[<nikaop] 果實 《美幌, 屈斜路, 塘路》